大正元年十月一日第三種郵便物認可　（毎月一回一日發行）　大正元年十二月一日發行

近代思想

十二月號

法律と道德（感想）……榮（一）
唯一者（評論）……大杉榮（二）
科學と進化（研究）……高畠素之（六）
ソシオクラシー（研究）……小原愼三（九）
座談（感想）……榮（一四）
ヘッダと二十世紀（批評）……寒村（一六）
廊下にて（詩）……土岐哀果（一八）
工場へ工場へ（詩）……飄風（一九）
ワイルド小話（寓話）……和氣律次郎（二〇）
艦底（小說）……荒畑寒村（二三）
ショウ劇「新聞切拔」（梗概）……堺利彦（二七）
賣文社より（雜錄）……澁六（三三）
大久保より（雜錄）……榮（三四）
新刊紹介……記者（三五）

近代思想社
東京府下大久保百人町三五二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

213-442254
Asia Library
AP
95
J2
K47
no.3

!!! 戰史にあらざる快著 !!!

▲三宅雪嶺＝大木伯爵＝
幸田露伴＝黑岩周六＝諸先生序文

陸軍步兵大尉 江上新五郎君著

（新刊）

天闇一窺

定價金八十錢
郵稅金六十錢

仙經??
神託??
佛讖??
妖言??
大奇書

著者江上大尉昨秋或非常事件に座し人生の一大事因緣を悟り宇宙の秘密宮天地の無盡藏底を拂ひ鑰を奪ひて照見す因みに餘生を筆舌に委ね以て至道の弘宣に從はんと志し今や其第一筆として本書を公にす既に本年正月人事の運命を逆睹して五事の豫言を爲す鑿々的中して今や三事を剩すのみ本書亦鬼言魔語狂文至理紙幅に溢れ人をして其不可思議なるに昏殺迷倒せしむ

書中載する所敎育論あり宗敎論あり軍事消息あり哲學醫學あり社會主義論あり道德戀愛藝術等凡そ現代に喫緊なる宿題一として其妙腕に上り靈筆に發して眞妄正邪の辨を明にせずといふ事なし而も其骨髓や端倪し易からず

而して著者は家人世人より狂人と目せらるゝこと半歲餘從て如何にして此の大珍を世人に了解せしむべき哉を備さに工夫すること茲に二百日其結果本書となる以つて其の內容を彷彿すべき也著者はそれ狂か神か妖か仙乎乞ふ一覽して後に驗せよ

發行所　振替貯金口座三四三三　東京市芝區露月町　實業之世界社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

痔疾其他肛門病
専門治療

東京肛門病院

院長　谷泉

東京市芝區西久保櫻川町二
電話芝　特長二七六八番
　　　　　　三六七一番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

第三回

新學期開講

● 切實なる時代の要求に依りて生れたる最も實際的なる漢學講義錄!!（此際入會者には特典あり）

普通漢學講義

講義　毎月二回發行　　講師　博士、學士、其他數名

會費　一ケ月　四十錢　一ケ年（全部四圓四十錢）　　會期　一ケ年

漢學は東洋思想の源泉にして東亞文明の根本たり其敎訓の深遠なる其興味の無限なる一朝にして之を悟るべからず然るのみならず漢文學は日本文學の一支源にして其感化の及ぶ所至大至深なり苟くも漢學の智識を缺きては遂に文を鳴する能はず。思想に志あるものと文章に志あるものと凡て必ず之を學ばざるべからず（附かも世に漢文學を平易に講述せるもの甚少し、本會夙に『漢學講義』を發刊して其平易なる講義と懇切なる指導により、大に斯界の歡迎を博し既に學期を重ねて基礎益々固く信用益々深きを加ふるに至れり、今や第三新學期を開講し大に特典を設けて會員を募集す。江湖斯學に志あるの士、速に來て入會せられよ。講義錄「見本付會則」申込次第無代進呈す

● 漢學獨習に缺く可らざる講義錄として好評嘖々たり

東京小石川大塚上町十三
振替（東）一一二九四番

漢學普及會

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

清潔、安全、輕便、經濟、衛生

瓦斯ストーブ新荷到着

歐米新形拾圓内外以上、和洋室孰れにも調和す

神田錦町　東京瓦斯株式會社陳列場

バアナアド、ショウ作
坪内文學博士序　松居松葉氏譯

（ショウ氏自署の寫眞、同夫人より譯者に贈りし書翰、英國名優バーカア氏より譯者に贈りし書翰及び「二十世紀」舞臺面）

文藝協會第四回公演脚本

二十世紀

原型三六〇頁　製本頗優雅　實價五拾五錢（送料金八錢）

文藝協會々長坪内博士本書に序して曰く『現代の世界的文豪中で、此「二十世紀」の作者ほど飛離れて多方面な人がまたとあらうか。（中略）殘念ながら我文壇の名家で、迚ても一人で此大家と相撲を取り得る人はあるまいと思ふ。假にも彼れを扱くには、我文壇の俊豪少くとも五人以上の協力を要するであらう。思ふに此「二十世紀」の譯者としては、著名な新聞記者でもあつて著名な雜誌記者でもあつて、敏腕の實務家、（中略）内外劇に精通した諸種の脚本作家であつて、オペラの作詞家でもあれば、飜案劇の老手でもあり、特に喜劇に成功したる作者、經驗に富んだ無臺監督でもあり、外國の風俗通でもあり、ショーの知人でもある松居松葉君ほど、其任に適した人はあるまい、全くあるまい。其飜譯の悉く垢ぬけがして幾ど創作かと思はれるほど自然な點に於て得易からぬ飜譯脚本の上乘と信ずる」と

春陽堂發行　（東京市日本橋）（振替一六一七一）

第一巻　第三號

法律と道德

法律は人を呼んで國民と云ふ。道德は人を指して臣下と云ふ。

法律が輕罪人を罰するのは、僅かに數ヶ月か或は數ヶ年に過ぎない。けれども道德は其の上に、更に其の人の生涯を呪ふ。

法律は著物の事などに餘り頓著しないが、道德は何うしてもある一定した著物を著させる。

法律は何にかの規定のある稅金の外は認めもせず拂はせもしないが、しかし道德は何んでも彼でもお構ひなしに稅を取立てる。

法律は隨分女を侮蔑してもゐるが、それでも兎も角小供扱ひだけはして吳れる。道德は女を奴隷扱にする。

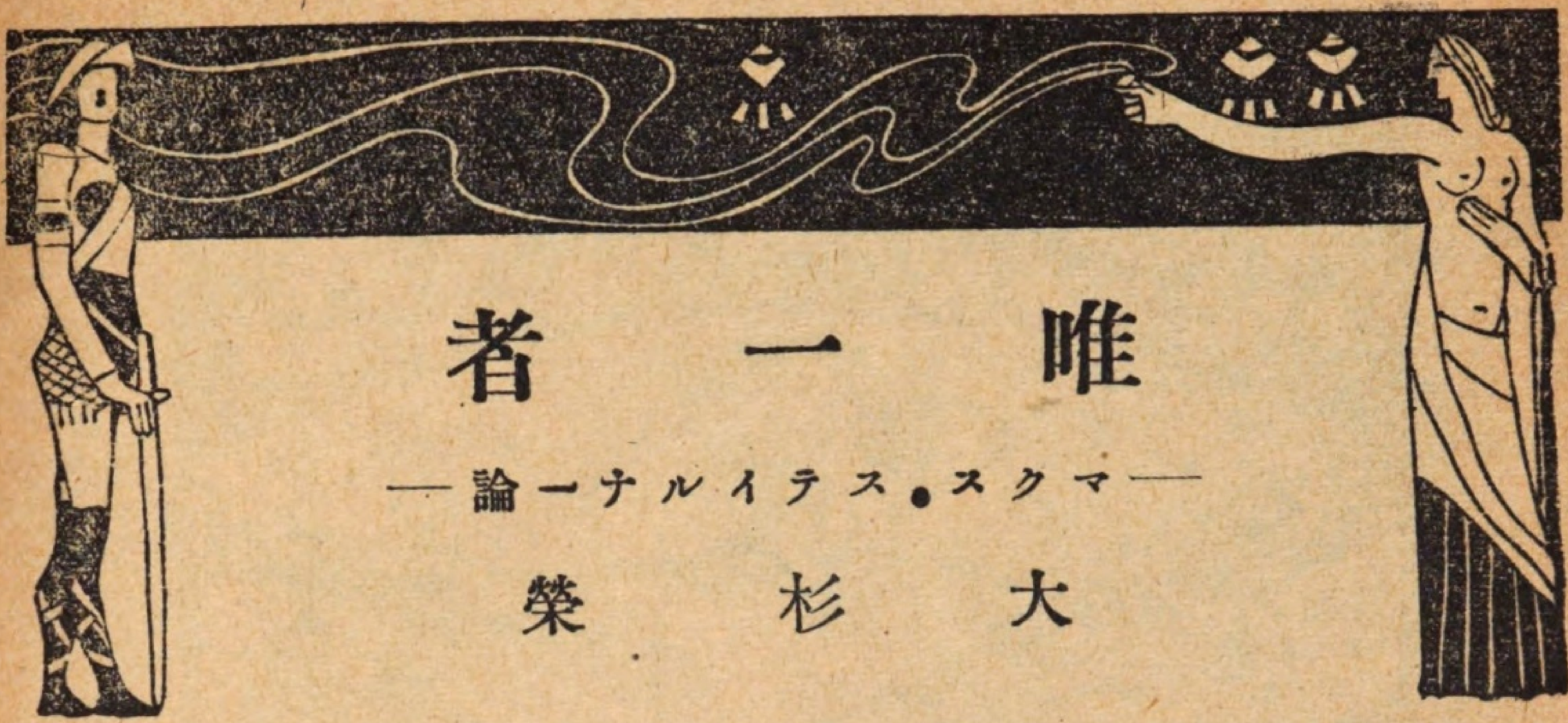
法律は、少なくとも直接には、女の智識的發達を礙げはしない。處が道德は女を無知でゐるやうに、然らざればさう裝ふやうに無理強いする。

法律は父なし兒を認める。道德は父なし兒を生んだ女を排斥し、罵詈し、讒訴する。

法律は折々壓制をやる。けれども道德はのべつ幕なしだ。

―榮―

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN



唯一者

—マクス・スティルナー論—

大杉榮

一

近代思想の根本が個人主義に在る事は今更に云ふまでもない。そして此の個人主義の權化としては、早くから我が日本にもニーチエが傳へられてゐる。けれども此のニーチエを論ずる時に、併せて其の先驅者たる、又或る學者の說に據れば實はニーチエも其の說を剽窃したんだとまで云はれてゐる、彼のマクス、スティルナーに筆を及ぼしたものは殆んどなかつた。

ニーチエがスティルナーの剽窃者だとは僕は信じない。又ニーチエが直接にスティルナーの著述から教へられたとも僕は思はない。ニーチエは矢張り自ら自らを云つた如く、Ich wohne in meinem eigenen Haus の人である。しかしスティルナーの思想が間接に隨分ニーチエに影響を及ぼしてゐる事だけは疑はれない。現に此の二人の著書の間には少なからざるアフィニテーがある。

二

スティルナーは假の名、實はヨハン・カスパー・シュミットと云ふ。一八〇六年十月二十五日、當時は普魯西の一都市、今はバワリヤに屬するバイロイトに生る。父は笛つくりにて、彼れが生後幾日もなくして死す。それよりして三年、彼れが母は藥劑師バラーシュテートと云ふに再嫁し、西普魯西の小都市クルムに移る。シュミットも亦共にあり。

シュミットは其處にて小學教育を受けたりしが、十二才の時再びバイロイトに歸りて、其地の有名なるギムナジーに通學す。居る事七年。更に伯林大學に入りて、一八二六年より一八二八年に至る二年間、ブウク、ヘーゲル、マーハイネツケ、リツテル、シュライエヤマハー等に就いて、博言學と神學とを學ぶ。其の後エヤランゲン大學にてラツプ、キーナー等の講議を聽く事一學期間。それより大學を捨てゝ、國內の旅行に耽る事一年。更に家事上の用向の爲にクルムに在る事一年。クヮニツヒスベルグに在る事又一年。此の間遂に大學に通ふの時間とてはなかりしも、自ら常に哲學と博言學との研究に身を委ぬ。

一八三三年十月、再び伯林に歸り、ブウク、ラツハマン、ミヘレ諸教授に從ひ、一時病みて聽講を廢せりしも、遂に Facultate

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

docenti の試業を終はる。

後に自らマクス・スティルナーと呼んだ此のシュミットの少時に就いては、一八三四年に彼れ自身の手になつた此の小自叙傳以上に、世に何事も知られてゐない。

彼れが其の後の生涯も、同様に矢張り黑暗の中に包まれてゐる。大學を終へてからは、伯林である高等學校と女學校とに教鞭を執つてゐたが、其處では別に彼れが自我說も說かれた樣子もない。其間に一度妻君も出來たのだが、六ヶ月ばかりして逃げられて了つた。彼れは狂人になつた母一人をかゝへて困つてゐたが、六年ばかりして二度目の妻君が出來た。そして此の妻君も亦、三年ばかりして逃げ出して了つた。

一八四四年、マクス・スティルナーの著「唯一人と其の財產」が、ライプチッヒのオットー・キガント社から出版せられた。そして一時は隨分盛んな評論の的ともなつた、本は禁止される、それにだん〱近づて來る四八年の騷動の爲に いつとはなに其の評判も消えて了つた。

スティルナーは此の本を出すと共に、其く教授してゐた學校の門は閉ざされる。僅にキガントの厚意で翻譯をして衣食の資を得てゐたが、窮乏に逐はれて、遂に行き方も知れずになつた。そして一八五 年に負債の爲に牢に入つた●

斯くして世に忘れ果てられたる彼れは、一八五六年六月二十五日、誰れに惜まるゝともなく死んで了つた。時に齡四十九年八ヶ月。

三

先づスティルナーの「唯一人」を本當に了解する爲には、更に遡つてヘーゲルを尋れ、又其の後繼者の二三を訪はればならぬ。

一體ヘーゲルはレストラティオーンの宮廷學者であつた 從つて其の伯林に講じた哲學も甚だ保守的な、反動的なものであつた。そして其の學徒の大半は權威主義に走つた。けれども彼れが哲學の方法は又、極めて革命的なものであつた。そして此の兩刄の劍の如き所謂ディアレクティクが、其の餘の學徒をして、思ひ〻の權威の陣屋に斬り込ましめたのであつた。

其の最初の運動は、先づ社會生活の基礎を神學から還俗せしめる事にあつた。宗教の起源が歷史的に考察せられた。宗教心其の者の哲學的批評が起つた。基督教道德に對する攻擊が現はれた。ストラウスの「耶蘇傳」、ブルノ・バウエルの「福音書の批評」及びフォイエルバッハの「基督教神髓」は、此の宗教の權威に對する反抗の三大代表作であつた。

「神性(ゴットハート)とは人の影が天に映つて、それに人の屬性をくつつけたものに外ならぬ。」斯くしてフォイエルバッハは、神學を人類學にそして基督教を人類教に變へて了つた。

けれどもひと度其の鞘を離れたディアレクティクの劍は、たゞに宗教の權威のみに觸れてやまるものでない。こゝに於てか、マクス、スティルナーの「唯一者と其の財產」は現はれざるを得ぬ。スティルナーは更にフォイエルバッハの人道の偶像を打倒してそして其の趾に「唯一者」即ち「自我」の教を建てた。彼れは素よりアンテクリスティアンであつた。けれども其れと同時に又、彼れが哲學はアンテモーラルであつた、アンテソーシアルであつた。彼れは「唯一者」の外の一切の權威を拒絕した。

四

「唯一者」の中心思想は、先づ次ぎの數句

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

の中に葬される。人道など、云ふものはない。人は自己の外の何者にも、神にも人道にも、從ふの要はない。個人の權利以外に何等の權利もない。

「汝の頭の中には幽靈がゐる……汝の腦髓の中には龜裂がある！。汝はある固定した觀念を持つてゐる……動かす可らざる民衆の權威と云ふが如き、一指だにも觸る可らざる道德の權威と云ふが如き……此等の固定したる觀念に憑かれて、瘋狂院に幽められたる、憐れむ可き、汝、狂人原よ！」。

此の固定したる觀念、此の幽靈的觀念、即ち更に具體的に云へば社會とか道德とか宗敎とか何んとか稱するものは、スティルナーを以て云はしむれば、生きたる人の血を吸ふファンピーアである吸血鬼である。人は此の吸血鬼を其の心より逐ひ出して了せざる限り、之れに服從する事を拒絶せざる限り、其の自由を得られない。そして此の自由は自らの我を以て萬事の始めと爲し、中ばと爲し、又終りと爲さゞる限り實現せられない。斯くして現存の一切の社會的羈絆が斷盡せられた時、其處に殘るものは、只各個人の自我あるのみとなる。唯一者あるのみとなる。

「私は唯一者だ。私の外には何者もない Ich hab' Mein' Sach' auf Nichts gestellt である」。道德的命令など、云ふのも、素より妄想に過ぎない。然るに世の人を治め導き敎へてゐる熊使のやうな奴等は、此の妄想の名に於て、笛や太鼓の音騷々しく囃立てて、何んにも知らぬ無邪氣なる人々を踊らせてゐるんだ。

五

スティルナーの個人主義は、斯くの如く隨分極端なものであるが、しかし彼れとても所謂他愛心の感情を非認してはゐない。只彼れは其れに義務的又は强制的の性質を帶ばしめる事を拒む。

「私は人を愛する。けれども其れは利己心からの自覺があつて愛するのだ。即ち其れが私に氣持が善いからだ。其れが私を幸福にするからだ。從つて私は人の犧牲にならうなど、は少しも思はない。只冷酷な事をするよりも、温情を以てする方が、人の心を得易いからだ」。

「私も亦 私の戀人を愛する。そして其のまなざしの甘い命令に服從する事がある。しかし其れとても矢張り利己心からなのだ」。

「私は又 感覺のある一切のものに同情する。其の苦痛は等しく又私をも痛ましめる。其の快樂は等しく又私をも喜ばしめる。私は一と思ひに其等のものを殺す事は出來るが、しかしぢり／＼と虐め拔くと云ふやうな事は出來ない。それは私自身の良心の平靜、私自身の完德の感情を失ひたくないからだ。吾々は宗敎の敎へるやうに罪あるものではない。吾々は皆んな完德のものだ」。

「私は花と同樣に、天命とか天職とか云ふものを持たない。私は私以外の何者にも屬するものでない。只私は、私の爲にのみ生きて、世界を享樂して、そして幸福に生活するの權利を要求するに過ぎない」。

「斯くして私が取る事の出來る、そして私が保つてゐる事の出來るものは、總て私のものだ、私の財產だ」。

「そして其れが爲には、總ての手段は、私に取つて正當なものとなる。しかし私の權利を創つてくれるものは、只力あるばかりである」。

「茲に一疋の犬が、他の犬の持つてゐる骨片を見て、若し默つて控へてゐるとすれば

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

それは自分が餘りに弱いと感じたからである。人は他人の持つてゐる骨片の權利を尊重する。それが人道だとして通つてゐる。そして之れに反すれば、野蠻な行爲、利己主義の行爲だと云はれる。

「利己主義者團体を組織せよ。何んの、財產は贓品也などゝ愁訴するの要があらう」。

六

スティルナーの此の名著も、四十年間圖書館の書棚の隅の方に誰れ見るものもなく塵の中に埋もれてゐた。けれども思想は進む。やがて此の知られざりし孤獨者が、其の時代の最も強烈なる思想家の一人であつたと認められて來た。そして今日猶人が求めてゐる文句の、正確な言葉が其處に見出されるのを知つた。一八八二年の始め 獨乙版の再版が出た。やがて佛譯も出た、英譯も出た、伊譯も出た。其他大概の歐洲語に反譯せられた。 そして ジョン・ヘンリー マッケーの如きは、十ケ年の苦心の後に、「マクス・スティルナー の生涯と著作」を著はし、 猶「マクス・スティルナー の小論文集」を出して、其の新研究者に少なからざる便宜を與へた。

僕はスティルナーの此の議論には、隨分多くの誤謬のある事を認める。けれども其の事は今玆に云はない。只僕は、此の書の著はされた當時の獨乙國情を顧みる時、此の書の歷史的及び哲學的價値の甚だ深大なるを思はざるを得ない。

ヘーゲル派の左黨から出たあらゆる著書の中で、一八四八年前の普魯西國家に對する、其窒息さすやうな强壓的規律に對する、之れ程の猛烈な反抗は見出され得ない。そして又、當時の所謂自由主義の徒が、力によつて權利を獲得する事を知らない臆病を之れ程までに痛烈に罵つたものは、其の後とても餘り多く見出され得ない。

彼れと同代の自由主義者が要求した自由は、彼れに取つては、丁度乞食に投げ與へられた施し物に過ぎなかつたのである。彼れは所謂其の自由と財產とを 只其れを獲得し得べき自己の力の上によらしめた。英譯書に 序文を載せたジェー・エル・ウォルカーは、スティルナーを以て政治的自由の哲學的基礎を置いたものであるなどゝ云つてゐるが、之れは彼れが眞精神を全く誤解したものに過ぎない。スティルナーは所謂政治的自由などに對しては、只輕侮の念の外はなかつたのである。彼れは、若し乞食して始めて貰ひ得る位なら、そんな自由は遣らうたつて受取る事を拒む事を主張した人である。自分の力によつて、自分に屬するものを獲得する事を知らない、そして自分の權利や自由や獨立を乞食して歩るく所謂自由主義者は、實に彼れが最も筆を極めて罵倒した處のものである。

强壓に恐れて、社會を回避し逃晦する個人主義者は、僕之れを憐れみ且つ憎む。僕は殊に此の點に於て、現代の我が日本の社會に、力の宗教を說いた此のスティルナーや又は彼ニーチェなどの剛强な個人主義的哲學が 更に幾度か繰返して說かるべき要ある事を思ふ。

「唯一者と其財產」と云ふ此の本を讀んだゞけでも、忽然として罪惡は淨められ、過誤は保證せられ、そして束縛は解かれたやうな氣になり、且つスティルナーのやうな、恐らくば當代の唯一の自由人であつた彼れのやうな、自由人になる。

――テオドル・ランダル――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

科學と進化

高畠素之

人の自覺に依つて其の生活法が定まるのでは無く、其の反對に、人の社會的生活に依つて其の自覺が定まるのである

——マルクス——

大杉君も云はれた通り、動植物の進化及び地質天體の變化に關する學說が、近頃大分漸化說から激化說に傾いてゐるのは事實であるが、漸化說の出る前には矢張り激化說が勢力を得てゐた。例へばキュヴィエーの天變地異說などが夫である。

キュヴィエーは動物の化石を調べて、其の因緣を說明するために、天變地異說と云ふ一種の激化說を案出した。此の說によると、天地開闢以來今日に至るまで地球の表面には少くとも十四五回の大變動があつて、其の度每に古い動植物が死に絕えて、其の跡に更らに新らしい一種の動植物が造られたと云ふのである。

此の說は當時の學者間に非常な勢力を得て、キュヴィエーの唱へることならば、一も二もなく之を信ずると云ふ有樣であつた。

其の頃佛蘭西には例の大革命が起つて、之まで社會の中堅をなしてゐた封建諸侯は全く勢力を失ひ、夫に代つて新たに社會の優勢階級となつた紳士閥はマダ極めて破壞的革命的の精神に富んでゐる時であつた。夫で自然に此の階級の要求を滿たすべき學說までが革命的激化的の色彩を帶ぶるに至つたものと見える。

其の證據には、當時キュヴィエーと時を同くしてゐたラマルクサンチレー等の漸化說は一向に世の顧みる所とならなかつた。「動物の種屬は長い年月の間に次第に變化して今日の有樣になつたので、決して一時の創造に依つて突然に現はれ出たものでない」と云ふ樣な微温い說では、迚も當時の急進的紳士閥が滿足しそうな道理がないのである。

所が其の後だん〳〵地盤の固まるに從つて、紳士閥はモウ革命激化の說を要さなくなつた。若し宇宙に變化と云ふものがあるならば、夫は必ず漸化でなくてはならぬ。

此の要求に應じて先づ起つたのが、ライエルの「齋一地質學」である。ライエルはキュヴィエーの天變地異說に反對して、地球の表面は決して一時に激變するものでなく、絕えず少しづゝ次第次第に變つて行くと云ふ漸化說を唱道して、大に學者間の歡迎を博した。

此のライエルに續いて起つたのが、ダーキンの自然淘汰說であ

ろ。ダーキン説によると、生物の種屬と云ふものは決して一時の激變によつて生ずるものではない。目に見えぬ様な微細の變化が長い年月の間、一段々々と積り重つて遂に一の新らしき種屬を發生せしむるに至るのである。

ダーキンの『種の起原』の出た三年後、即ち一八六一年には倫敦に萬國博覽會と云ふものが催され夫と同時に自由貿易、自由商業同盟などが實施されて、紳士閥は今や將に其の全盛の最高點に達せんとする時であつた。夫でダーキン説は直ちに紳士閥の採用する所となつて、一時ダーキン説を蛇蝎の様に忌み嫌つた耶蘇教會までが、近頃はモウ得意になつて『基督教と進化論』とか、『基督の進化論』とか云つてフレ廻る有様となつた。

一八六五年、即ちダーキンの『種の起原』の出た六年後、墺太利のメンデルと云ふ僧侶が一種の遺傳説を案出して、之を同國の『ブリューン自然協會記録』に發表したが、此の説は不幸にもダーキンの自然淘汰説と相異する點が多かつたので、當時は誰一人之を顧みる者がなく、三十餘年の默殺を受けて、此の頃漸く世の注意を喚び起す様になつた。今此の説の大要を摘まんで見ると、

「同一種屬の植物中、性質の異れる二種を合せると、新らしい混種が出來るが、此の混種の性質は常に必ず一定の割合で律せられる。從つて其の混種の親植物の性質を知つて居れば、豫めドンナ混種が出來るか分るのである。

「今茲に「長大性」と「矮小性」との二種の豌豆があるとする。試みに此の兩者を合せて見る。スルト其の結果皆な「長大性」の豌豆のみが出來て「矮小性」のは一本も生じない。次に此の混種の種子を取つて蒔くと、今度は長大と矮小の兩種が出るが、長大が三本出るとすれば矮小は一本のみで、其の割合は何時も三と一である。夫から次に此の矮小の種子を蒔くと、永久に矮小の種類のみが生ずるけれども、長大の種子から出る方は永久に三と一との割合で必ず長大と矮小との二種である」。

此の筆法で行くと、ダーキンの信じてゐたよりもズット短期間で新種が出來る筈であるが、此の説は不幸にして當時の學界から排られてしまつた。

併し世の中は何時までも一つ所に停滞してはゐない。全盛を極めた紳士閥も何時まで天下無敵でゐる譯には行かない。十九世紀も終りに近いた。世の中が何となく騒々しくなつて來た。

恰も此の時、和蘭にデ・フリーと云ふ植物學者が出て、一種の激化説を唱道し始めた。

デ・フリーは三十年も自分の庭で月見草の研究を積んだ結果、遂に其の栽培せる五萬本の月見草の中、八百本即ち一分五厘までは親木とは全く性質形狀を異にせる新種であつて、其の新種から生じた子孫は又殆ど皆な其の新種の特色を受け繼いでゐること

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

を確めた。此の實驗によつて、彼は「生物の新種と云ふものは決して目に見えぬ様な緩漫な變化に依つて生ずるものでなく、寧ろ突然の激變に依つて生ずるものである。そして突然の激變に依つて生じた新種は、其の次に激變の起るまでは少しも其の性質を變へずに居る」と云ふ結論に到達した。

デ・フリーの『ミューテーション説』が出たのは一九〇一年であるが、夫れから六年後、即ち一九〇七年に劍橋大學のパンネット教授が『メンデリズム』と云ふ一書を著はした。

之は前に述べたメンデルの遺傳説を其の儘に祖述紹介した本であるが、三十年前には誰一人顧みる者も無かつたメンデル説が此の書の發行と共に突然歐洲學界の耳目を聳動して、今では立派に遺傳學説上の一派を成してゐる。パンネット教授によると、動植物に生ずる變化の中、遺傳されるのは多くは突然の變化であつて徐々に生ずる變化は餘り遺傳されない。故に進化の基礎としては漸化よりは寧ろ激化に重きを置くが至當である。

此様に近頃の進化論は大分、漸化説から激化説に傾いて居るのであるが、此の傾向は又地質學天文學の上にも現はれて居る。例へば、英國のシー教授は地球上に山嶽の生ずる原因を説明して、大洋の底には百年毎に必ず一回宛、大きな罅隙が生じて其の爲めに大地震が起り其の結果、山嶽が生ずるのであると云つてゐる。そして瑞典の物理學者アレニウス及び佛蘭西の天文學者フランマリオンも亦此の説に裏書してゐる。

ラプレースの星雲説によると、吾人の太陽系統は決して突然に生じたものでなく、先づ星雲と云ふ極めて熱度の高い蒸氣の大塊が出來て、夫が徐々に冷却し殆ど無限の長年月を費してヤット今日の太陽系と云ふものが出來上つたのである。

此のラプレース説に對して、チャン、レーン、デゥンカン等の諸學者は、「吾人の太陽系は決してラプレースの云ふ様に無限の長年月を閲して出來上つたものではなく、或る時期に突然太陽が爆發して、其の結果一時に諸遊星が生じたのである」と云ふ説を唱へてゐる。之も亦天文學上に於ける激化説の餘波と見做すことが出來る。

此様に近頃の生物學、地質學、天文學は總て皆な漸化説から激化説に傾いてゐる。此の次に又新らしい漸化説が勢力を得る頃は、世の中はモウ大分變つてゐるかも知れない。

帳場の蔭より

岩出白雨

三年ぶりふと見たくなり國禁の、書を取出しぬ書棚のすみより。

乃木の死をたゝへて泣きしその日より、牧水といふ詩人きらひになりぬ。

たそがれの書齋のすみの刑死せし、友の寫し繪がふと目にうつれり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ソシオクラシー

小原愼三

一

ソシオクラシー (Sociocracy) は、米國の社會學者ウォードの創唱に係る社會學上の術語である。從來の政治學上にも　貴族政治(アリストクラシー)とか、共和政治(デモクラシー)とか、或は官僚政治(ビューロクラシー)等の如き、種々の政體を表はすに使用されたる術語がある。ソシオクラシーも之と同様に一種の政體を表はすべき言葉であつて、之を日本語に譯すれば社會政治とでも云はう。

然し、貴族政治とか共和政治とかいふ術語は、單に政治學上の術語として存在してゐるのみでは無く、現に存在せる、或は歴史上の或時代に於いて存在せし、一定の政體を指したものである。所が社會政治は、既存若しくは現存の政體を指したものではない即ち社會政治といふ名の政體は、歴史上の何れの時代に於いても未だ嘗て實現された事のない一種の政體を意味するのである。

社會政治はウォードの社會學の結論である。詳はしくいへば、ウォードの純理的社會學を前提とせる實際的社會學である。

社會政治の意味内容を明かにせんが爲めには、勢ひウォードの社會學の純理的方面を知らねばならぬ。今次に其概略を説明する。

一體、嚴密なる意味に於ける科學といふものは、其の研究の對象を必ず宇宙の或特殊の方面に限らればならぬ。即ち科學の職分は正に一定の宇宙現象の理法、法則を發見闡明する事に存するのである。然るに　此の理法とか　法則とかいふものには、必らず力(フォース)といふ觀念が伴つて居ればならぬ　換言すれば、理法や法則は要するに此の宇宙に充滿した精力(エネルギ)が現象として發現するに際して執るべき一定の道筋、若しくは經過を意味するに過ぎない。

譬へば、物理學には夫れ夫れ獨特の力(フォース)があり、化學には又、夫れ獨特の力がある。而して此の物理的力(フィヂカルフォース)の發現の經過を明かにするのが物理學者の職分であり、化學的力(ケミカルフォース)の發現の經過を明かにするのが化學者の任務である。

社會學も既に一個獨立せる科學として認められたる以上は、必ず他の科學と同様に、夫れ獨特の力(フォース)、及び夫れ獨特の理法、法則を有すべき筈である。然らば、社會學上に於ける力(フォース)、即ち社會的力(ソシアルフォース)とは、抑も何を指すものであらうか。

ウォードは、此の社會的力を社會其のものに求めずして、之を組織せる人間の心裡に求めた。

彼の説に依ると、人間の心(マインド)といふものは、之を二樣の方面に區別することが出來る。即ち一は智覺

的方面（オブサイド）であつて、他は感覺的方面（アフエクチブサイド）である、而して此の知覺的方面は、高等動物に於いて發見すべき理智（インテレクト）の基礎を成すものであつて、感覺的方面と相並んで、生物の心理的作用を營むべき實に重大なる要素を成すものである。

然るに極々下等な動物を見ると、其の心理的作用に於いて、感覺的要素は可成に發達して居るけれども、知覺的要素は殆んど缺乏してゐるものが多い。從つて此の時代に於いては、動物の運動は全然衝動的で、唯だ外界より來たる刺戟の如何に依つて其の運動を異にするに止まる。之に依つて判斷すると、感覺は知覺よりも先きに動物に現れたものと言はればならぬ。

然らば、感覺といふ作用が何んの爲めに動物に發現したものであらうか。勿論之は自然陶汰の結果といはればならぬ。即ち感覺は動物が營養作用や生殖作用を營む爲め必要なる、一種の生活機能として現れたものである。

感覺は斯の如く、個體の保護と、種族の維持との爲めに現はれたるものである。即ち老猾なる自然は快感といふ餌と、苦痛といふ罰とに依つて、動物をして、其個體の保護と種族の維持とを強ひて遂行せしめんが爲めに、動物に感覺を與へたのである。

所が動物が營養作用を營み、生殖作用を行ふのは、全然自ら豫期せざる偶然の結果である。即ち味覺の快感を滿たさんが爲め、或は空腹の苦痛を免れんが爲めに、食物を攝取した結果が偶然にも個體の營養となり、生殖慾の快感を貪らんが爲めに生殖作用を行ふた結果が偶然にも種族の維持となるに過ぎない。

故に、自然の立場から見れば、感覺は個體の保護及び種族の維持の爲めに存在し、動物の立場から見れば、感覺は單に快樂の爲めに存在する。

人間は何故に複雜なる社會を作り、何故に政府とか生產制度とか教育組織とか、或は都市とか、寺院とか、其他百般の施設を築き上げたであらうか。斯の如き絕えざる努力、活動の基礎根底を爲して居るものは、實に人間の心理作用の覺感的方面（アフエクチブサイド）より發する慾望、即ち快樂を追求し、苦痛を免れんとする念ではないか。

以上の前提に依つて、ウオードは、社會的力（ソシアルフオース）といふものは、全く人間の快樂を欲する念、即ち慾望なりとなし、其の種類を分類して、次の六個と定めてゐる。一、生殖的慾望、二、營養的慾望、三、審美的慾望、四、情緒的慾望、五、道德的慾望、七、智的慾望。

自然は人間に、其の生理的職能を遂行せしめんがために快樂を授けた。然るに人間にとつては、此の快樂其のものが最も重大なる價値を有するものとなつて、個體の維持とか、種族の繁殖とかいふ樣な遠大なる目的は殆んど其の眼中に措かれ無くなつて了つた。從つて人間の一擧手一投足の動因となるものは、より小なる快樂より、より大なる快樂に進まんと欲する念、即ち人間の慾望・動機、若しくは意志である。故に人間の組織せる社會、及び

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

之に附随して生ずる、道德とか政治とか法律とか或は經濟とかいふ樣な總ての社會現象は、畢竟するに慾望といふ自然力の發現せるものに過ぎない。

斯の如く、ウォードは人間の慾望の綜和を以て社會力(ソシアルフォース)となし、之を以て社會學の當然取扱ふべき獨特の自然力となしてゐる。

二

社會力(ソシアルフォース)の意義性質は、以上述べた所に依つて明かになつた。然らば此の社會力といふ特殊の自然力は如何なる形式に依り、如何なる理法に從つて發現するものであらうか。

前に述べた通り、人間の心理作用には、感覺的方面(アフエクチブサイド)と知覺的方面(パーセプチブサイド)といふ全然相異した二樣の働きがある。此の感覺的方面が結局慾望となり更に社會力となることは既に說明した通りである。然らば知覺的方面は、果して如何なる形式に依つて發現し、如何なる意義を社會學上に於いて有するものであるかといふに、ウォードは之を以て人間の理智(インテレクト)の淵源なりとしてゐる。

所が、此の理智といふものは、其性質に於いて、感覺とは全然異つたものである。感覺は慾望と關連して直接、力(フォース)として發現するけれども、理智は決して力(フォース)となるべき性質のものではない。故にウォードは、慾望を以て社會の動的要素となし理智を以て其の指導的要素となしてゐる。

若し人類に理智といふ要素が全然缺乏してゐるならば、人間の慾望は唯だ一種の自然力として盲目的の運動を行ふに過ぎない。然るに理智は此の慾望といふ自然力に統一をつけ、一定の目的に對つて進ましめ、自然に拋擲せるよりも更に一層大なる効果を生ぜしめる。

人間以外の動物を見るに、彼等は全然其の境遇(エンバイロメント)に支配されてゐる。即ち境遇は單に彼等の性質習慣等の上に變化を生ぜしめるのみならず其の羽毛とか四肢とかいふ樣な肉體にも、非常なる影響を及ぼして之を變化せしめる。

然るに優れたる理智を有する人間は、決して他動物に於いて見るが如き甚だしき變化を、境遇に依つて其の精神肉體に及ぼさるるものではない。即ち人間は或意味に於いては境遇を作る動物である。彼等は寒國に移住すれば、其の優秀なる理智に依つて直ちに防寒の設備をする、熱國に赴けば又是に應ずる策を施す、故に人間は、境遇を作り境遇を支配する力を備へたる動物といはればならぬ。

人間は先づ其の理智の助に依つて、直接攝取(Direct Conation)から間接攝取(Indirect Conation)、に移つた。

自然が供給する天然の食物を、其の儘攝取して生計を營むのが直接攝取であつて、人間以外の動物は大底之を行つてゐる。然るに間接攝取となると、自然が供給して吳れる生活資料を其儘使用

することに甘んじないで、人爲的に其の質を變化せしめ、其量を增加せしめて、之を攝取するのである。經濟學上にいふ生產とは全然之を意味する。更に詳しく說明すれば、間接攝取は、直接に欲するものを獲んと努力 ずして、先づ之が獲得に必要なる器具の生產に取懸る。重い石を擡ぐるに、直接手を以てするよりも、槓杆といふ道具を使用する方が遙に有効である通り、間接攝取が直接攝取に比して、より大なる効力を有することは勿論である。

人間が其の理智の力に依つて、外界を利用攝取する方法に二通りある。一は自然物の利用であつて、他は自然力の利用である。彼等は一方に於いては、奴隷、牛馬、鳥獸、木石等を利用攝取すると同時に、他方に於いては、水力、電力、蒸汽の膨脹力等の如き宇宙の精力を直接捕へ來たつて利用してゐる、近代に於ける應用科學の職能は正に此の後者を代表してゐるものと云はねばならぬ。

中世紀時代の神學者は、盛んに目的論といふ說を稱へた。此の說は神は一定の目的をもつてゐて、此の目的通りに宇宙の進化發展を司どつてゐると主張した。近代科學の發現は、此の說の全然根據の無きことを遺憾なく證明したが、ウオードは此の神學上の目的論と對照して、社會學上の目的論を立て、前者を神學的目的論(Theo-teleology)と呼び後者を人爲的目的論(Anthropo-teleology)と呼んでゐる。近頃になつて此の人爲的目的論を更に二分して個人的目的論（インヂビヂュアル・テレシス）、及び集合的目的論（コレクチヴテレシス）としてゐる。(テレシス(Telesis)はGenesisに對照した言葉で、目的論と云つては不穩當だけれども、適當な譯語がないので此儘にして置く)。

人爲的目的論とは、人間が其理智の力に依つて其の境遇外界を、自己の目的通りに利用攝取し、變化改造することを意味し、個人的目的論とは、個人が外物を自己の目的通りに利用攝取することを意味し、最後に集合的目的論は、集合人が社會の理法を明かにして、社會力（ソシヤルフォース）を其の目的通りに利用することを意味する。社會政治（ソシオクラシ）は全然此の集合的目的論の別名に過ぎない。

三

近代科學は皆、理論的の方面と實際的の方面とを有してゐる。前者は純理を攻究し、後者は此の純理を應用して、人間社會の利福を增進せしめんことを目的としてゐる。

社會學も嚴密なる、獨立せる科學である以上は、他の科學と同様に、理論學と實際學との兩様の方面を有すべき筈である。

譬へば、物理的力（フイヂカルフォース）の法則を研究するのは、純理的物理學であつて、此の研究した結果を土臺として、物理的力（フーヂカルフォース）を人類に對して有利なる方法に應用するのが應用物理學の職分である。

然らば、社會學も純理的社會學、實際的社會學との兩方面に區別し前者は社會力（ソシヤルフォース）の運動、理法の發見闡明を目的とし、後者は此の研究した結果を土臺として、社會力を人類に對して有利なる方法に應用することを目的とせねばならぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

人間は古來、其の優秀なる理智の力に依つて、殆んど總ての自然界を征服した、

彼等は單に有機物、無機物を自己の欲するが儘に利用し、攝取し、宛然たる自然界の帝王の地位を占め居るのみならず、又眼に見えない微妙なる宇宙間の精力を直接捕へ來たつて、從順なる奴僕として自由自在に使用してゐる。彼等は又、古來幾度か人類に災厄を齎らした水力や電力を捕虜として、却つて忠實なる自己の味方とならしめてゐる。然し此の廣い自然界には人間の智力が未だ嘗て征服したことの無い一個の領域が存在してゐる。此の領域に於いては、盲目なる自然力が、人間の微弱なる智力を嘲笑しながら、依然として暴威を逞しふして人類を苦しめてゐる。此の領域は即ち社會である。

從來の政治家は、社會を統治するのでは無く、却つて社會に統治されてゐた 彼等は社會力とは何物であるか、是等の力は如何なる形式に依り、如何なる理法を通じて發現するものなるかに就いては殆んど無智である。

社會力が人間の慾望に源を發してゐる以上は、社會には種種雜多の力が現れて來ることは免れない。之等の力の中には有益なるものもあれば、又有害なるものもある。有益なる力を助長し、有害なる力は彼の物理學者が畏るべき電力を捕へて利用するが如き意味に於いて、之を利用することは、從來の政治家にとつては、不可能の業である。彼等は啻に有害なる社會力を利用しないのみならず、力めて之を壓迫し、力めて之を除却し樣と努力した。慾望といふ社會力の泉源が枯渇しない以上は、如何なる有害な社會力も到底除去することは出來ないといふことを、彼等は全然知らなかつた。

集合的目的論は科學的の政治を主張するものである。物理學者や化學者が、宇宙の精力を捕捉して直接人類に幸福を齎らすが如く、社會の力及び理法を精密に攻究して、社會を人爲的に變革し、社會を、人類に對して最も多量の幸福を齎らすが如くに改造組織することを意味するのである。而して社會政治とは斯かる意味に於ける政體を指稱するのである。

理智は社會の指導的要素である。人類が個人的目的論に於いて、現時の如き進歩發達を遂げたのは全然理智の指導に基いたものであつて、又、理智の增進に基いたものである。

從つて社會政治の到達する唯一の手段は革命でも無ければ議會でもない、唯だ理智の增進である、智識の普及である。蝸牛の歩を以て、一歩一歩漸進的に前進するのが、社會政治を實現する唯一の政策である。

以上はウォードの社會學及び其の結論たる社會政治を紹介したるに止まる、從つて此の說の果して眞理であるか否かは、敢て玆に論じない。

座談

榮

一

一八九一年の春、巴里に L' Endehors と題した週刊の小雑誌が生れた。譯すれば「門外漢」とでも云ふのだらう。ゾ・ダクサを筆頭として。エミル・ヴエルハーレンだの、オクタヴ・ミルボーだの、アンリ・ド・レニエだのと云ふ、當時の年少氣鋭な新しい人の手につくられたものだ。其の宣言の中に云ふ。

「吾々は如何なる黨派にも、又如何なる團體にも屬するものでない。吾々は門外漢である。吾々は只吾々の道を、めい〳〵獨りで進んで行く。そして吾々は、人を濟度し又は人を盲目にする、彼の信仰などゝ云ふものを持たない。今日の社會に對する吾々の憎惡も、敢て吾々に何等の確信をも生ぜしめない。吾々はより善き將來を夢みる事もなく 只闘ひの樂しみの爲に闘ふ。幾世紀かの後でなければ來ない明日の事などは何うでも善い。吾々は門外漢である。一切の法律、一切の規矩、一切の學說、よし夫れがアナーキステックのものであつても、吾々は此等の總てのものゝ門外漢である。今から、たつた今から、吾々は吾々自身であると云ふ傲慢な自覺を以て、吾々の同情と狂熱と、温順と憤怒と、及び吾々の本能とに、吾々の身を任せやうと思ふ」。

ジヤン・ド・ミテイは此の雜誌を批評して「見かけはあんなに見すぼらしい、そしておとなしい、丁度何處かのディレタントか何かの小倶樂部の機關でもありさうな此の小雜誌が、街の一揆よりももつと激しい暴風を惹起したのだ。成程隨分亂暴な事も書きは書いた。しかし其の亂暴はいつも巧みに文學的形式で蔽はれてゐた」と云つてゐる。

實を云へば、此の連中の中には隨分アナーキストも隱れてゐたのだ。先きに云つたオクタヴ・ミルボーなども、アナーキストフイロゾフアとして歌はれた人だ。其他にもジヤン・グラーヴがゐた。又シヤル、・マラトーなどもゐた。

當時の佛蘭西は今日の日本と同じくレアクションの時代で、其間には隨分共通の事實が多いやうだ。僕は今日の日本にも一ツ位は斯んな雜誌を欲しいものだと思ふ。

二

雜誌と云へば、今日の日本の文藝雜誌の中で、僕は「白樺」が一番好きだ。創作にしろ評論にしろ、早稻田や三田や帝文などの、とても及ばぬ新味と深味と强味とがあるやうだ。

白樺の人達は貴族の坊ちやんと云はれるのが何によりも嫌いだと云ふ。しかし事實は事實に違いない。そして僕は此の事實から、あの人達の行動を少なからざる興味を以て見てゐる。

由來貴族は、物質的にも精神的にも、そして善い意味にも惡い意味にも、社會の同化者として大役を勤めたものである。尤もそれはエキスプロイテーションの結果が利用されたものではあるが。彼等は到る處の新發明品や奢侈品を、思ふまゝに外國から輸入した。そして平民が萬事其の國の文物の中に閉ぢこもつてゐる間に、彼等はいち早くも諸外國の粹を集めたコスモポリタンに成りすましてゐた。平民が隨分荒い思想や趣味の中に閉ぢこもつてゐる間に、彼等は既にいやが上にも純化に純化を重ねられてゐた。そして夫れが漸々平民の間に模倣

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

せられた。

佛蘭西革命當時の話に、貴族同士の間には全く階級的精神が滅ぼされてゐたけれども、平民同士の間には嚴重に幾段かの階級が守られてゐたと云ふ。今日でも親が子供を比較的に自由にしてゐるのは貴族だ。平民はいくら理窟を云はれても分らない。そして今の中から親の云ふ事は何んでも聞くやうに仕込んで置かなかつたら、私達が年とつてから何うして此の子等に食はして貰へませう、などゝ云ふ。

白樺は此の貴族の血を受けて、そして一面に於て父祖からの惡弊に反抗すると同時に、他面に於て成上りのブールジヨアジーに反抗する、若い貴族の人達から成る。

僕等は白樺を見るたびに、いつもトルストイやクロポトキンの少年時を想ふ。トルストイやクロポトキンは、白樺の連中のやうな若い貴族が、更にもう一つ改宗した人ぢやあるまいか。

三

此の頃の「太陽」を見るたびに、先づ僕がひろげて見るのは、內田魯庵氏の「氣紛れ日記」だ。けれども僕は、いつも面白い〱と思つて讀みながらも、まだ何にか物足らぬもの丶ある氣がする。此の人も矢つぱり老人連で、坪內博士などよりは餘程善いやうでもあるが、兎角に骨董臭い氣がして困る。

九月七日の日記の中に「今日米の値が日に益々貴く、人は皆物質に支配せられて或は窮して社會主義に奔らんとする時」などとあるのは、隨分理解のあるらしい此の人の言葉としては、餘りに世間並に過ぎやしまいか。

しかし乃木大將の殉死の事を論じた次手に、「政府の强壓を受ければ、直に飜然として悔悟する社會主義者や、其他の所謂新思想を標榜する輩の無氣力な、意氣地なさ」を罵倒した處などは、謹んでお叱りを受けて置く。

馬場孤蝶氏がそろ〱又評論を書き始めて來た。僕は此の人が創作や飜譯をやるよりも、評論が一番むいてゐるやうに思ふ。しかも其の兄の馬場辰猪の血を受けてゐるやうな處が、今日の沈滯し切つた文壇には最も妙だらうと思ふ。

「黑燿」の「老朽語」、「三田文學」の「地下へ」、何れも齒切れの善い、そして皮肉の深い書き方の、面白いものだ。

「僕等は個人の權威を認める事、個人を解放する事、隨つて言論及び思想に絕對の自由を得せしめる事などに盡力するのが、やがて正義人道の爲めに戰ふことだと信じて居る。唯だそれが爲めに華々しく戰ふ事は僕等に許されない運命なのだ。僕等は靜にアンダーグラウンド（地下）の戰を續けやう。」

「尙、僕等の盡し方、戰ひ方が足りないと云ふのなら、失敬だが、世間の實狀をもう少し見て呉れ給へ。もう少し盡せる世か戰へる世か、僕は餘まり進んで說明することは、反つて君の聰明を疑ふことになりはしまいかを恐れるのだ。」

僕は此の人等の立場として、此のアンダーグラウンドの戰と云ふ事を頗る面白いと思ふ。けれども「華々しく戰ふ事は、僕等に許されない運命だ」として决めて了ふのは、隨の人分妙なものぢやあるまいか。今の智識階級達はよく「世間の實情」其の者から出た事を、此の運命だとか或は個性だとかに塗りつけて了ふのが多いやうだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ヘッダと廿世紀

寒村

■十月廿六日　有樂座に近代劇協會第一回興行の「ヘッダ、ガブレル」を觀た。實を云ふと、舞臺上の表現が舞臺監督の伊庭孝君の主張や議論と、反比例をしはしまいかと餘計な取越苦勞をして居た。處が實際舞臺上の效果を見るに及んで、その全く杞憂に過ぎなかつた事を喜こんだ。そして最も面白いと思つた事は。上山草人氏とか、山川浦路氏とかいふ人は、曾て立派に舞臺に立つた人であり、其他の人々も、概れ經驗のあるやうに聞いて居たが、舞臺といふ事にかけては全然素人の伊庭孝君が、今次の公演に於て一番舞臺で成功して居る事である是で見ても、今後の俳優は脚本を了解し、自分の扮する役の性格を了解し得るものでなければ、ダメだといふ事が解る。

■更に面白い事は、左團次一派の自由劇場と、早稻田派の文藝協會と、此の近代劇協會との比較である。此の三つの中で、自由劇場の俳優が一番誇張的で、いかにも舊俳優のやつて居る新劇といふ感があり、文藝協會も亦、その俳優は非常に舊い型に囚はれて居て、不自然な點が多い。然るに近代劇協會の俳優は、一二子を除くの外、未成品といふ憾みは免かれないが、一番ナチユラルで、惡達者といふやうな嫌な處が些しも無い。要之、自由劇場はその舞臺の表現に於て最も保守的で、近代劇協會は一番急進派であらう。そして恰ど此の中間に位せるものは、即ち彼の文藝協會である。

■此の劇のヒロインたるヘッダ、ガブレルの性格に就ては、いろ〳〵こちたき議論もあるが、それは今こゝで述べては居られない。兎に角、此の作はイブセンの作物中でも、「人形の家」とか、「人民の敵」とか、乃至「社會の柱」とかいふ、所謂社會問題劇とは違つた性格劇である。故にイブセンの代表的作物を通じて見らるゝ、現代社會に對する痛烈なる攻擊、個人の絕對自由の絕叫等は、此の作に於て見る事は出來ない。又同じく女性を主人公としたものではあるがヘッダは、ノラのやうに惡いと思つた事は直ちに抛つて、善と信ずる方に向つて驀進し、その爲には子の愛も、夫婦の情も捨てて顧みないといふやうな一途な女ではなく自意識の強い、本能主義の、然も內心極めてロマンチツクな、頗ぶる矛盾複雜した性格を有した女である。彼女は最早レヨウボルクを愛せざるにも拘はらず、テエヤの如き女が彼の上に大なる感化を有せるを見ては、嫉妬に堪へられぬ女である。彼女は夫に對して些の愛情の無いにも拘はらず、彼がレヨウボルクに敵し難いといふ事は、到底忍び切れぬ女である。而してその高い自尊心と、その周圍に對する侮蔑嫌惡の念とは、遂に彼女をして悲劇的な最後を遂げしめるのである。

■メレヂコウスキーなんかは、ヘッダをバカに賞め上げて、テスマンを糞味噌にケナして居るが、然し一般の評家は、ヘッダの性格を以て極端な利己主義となす事に一致して居る。それにも拘はらず、僕があの劇を見て感じ、そしてヒロインに同情するのは、ヘッダの特殊なる、强烈なる個性の力である。メレヂコウスキーは「ヘッダの力は出口の無い爲に、遂に自身を滅ぼす事になつた。ヘッダの心は信仰無くしては生くる能はざる人のそれであつたが、然も彼女の信仰は去つて居る。もしヘッダにして、その名の爲に生きもし死にもすべき神を見出したならば　彼女はヒロイン、もしくば殉難者となつたであらう。」と云つて居るが

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ヘッダには全く、余り有る力を、如何にして如何いふ方に使つていゝか解らなくて、悶々して居るといふ風がある。「斯かる性格に在つて、もし内部の力が動作に現はれぬ時は、罪惡に導くは必然である。而してヘッダは、全部否定の理論家さへも達し得なかつた道德的ナイヒリズムに到達した。人間的な萬事と、凡ての存在とを憎惡し、そして最後に、靜かな且つ意識せる、自個滅亡の擧に出でたのである。」と、メレヂコウスキーはまた云つて居る。

■個人的の藝評に就ては、新聞などで隨分詳しく書いて居たから 今更くり返す必要はあるまい。只だ一寸感じた處を云へば、浦路氏のヘッダは始めから終ひまで怒り通し、當り散らし通しで、おまけに顔と語との表情は、まるで日本の芝居でする毒婦を見るやうな感がした。淺井氏のテスマンは、お人好しといふ處は可なり現はれて居たが、只だそれだけのもので、あれでは何だか高等商業邊りを卒業して、銀行へでも出る坊ちやんとしか受け取れぬ。もう些し學究肌な處も示す必要はなかつたらうか。要之、遂に一人、伊庭氏の判事ブラックに及ぶものが無かつた。

■十一月十七日、同じく有樂座に文藝協會の第四回公演があつた。出し物はバアナアド、ショウの「ユー「ネバ、キャン、テル」の譯「廿世紀」。目まぐるしい程活動して、盛んに皮肉や警句を連發する。蓋し文藝協會の俳優諸君―尠くとも土井氏や東儀氏―には、いかにも當はまつた芝居だ。

■ショウは要するに、此の劇で謂ゆる「男女間の決鬪」に就て氣焔を吐いて居る。三幕目で齒科醫バレンタインが、著述家クランドン夫人に對つて、「男女間の決鬪は、恰かも近世の砲術家と製艦家との爭ひの如きものだ。舊式な男の砲術に對して、親は娘に新教育といふ鋼鐵板を張る。男は更に新らしい砲術を發明する。只だ、男の新らしい砲術も奈何とも し難 いのは、舊式な女だ。」といふ氣焔を吐くのが全篇のヤマなので、是へお轉婆娘と惡戯小僧の滑稽だの、破鐘のやうな聲の辯護士だの、男に戀して居る事を自覺して「この心地をどう科學的に說明しやう」といふ娘だのを配して、無茶苦茶に騷がせ、盛んに著者一流の皮肉警句を連發させて、只だもう見物を笑はせるあし その笑はせ方たるや、クスグリ笑ひで然る。その皮肉にしても、いつ迄も頭に殘つて居るやうな物じや無い。

■僕は文藝協會の諸氏が、非常に舊い型に囚はれて居ると云つたが、これを見てもそれがよく解る。東儀氏のクランプトンの如き、「故鄕」の折のケルレルに比して、如何にも老巧にしこなして居るが、第一幕の「憎いアマだ……」の科白など、どう聞いたつて舊俳優じやないか。松井氏のクランプトン夫人は、部分的には實にいゝと思ふ處もあつたが、時々正面を切つたり、見得をしたりするので恐れる。土肥氏のバレンタイン、余り飛だり跳たりし過ぎるので、少々呆氣にとられたが、そこがイプセン劇などゝ違ふ處なのだらう。和泉氏のドーリー顔がまるで婆さんのやうなのが疵だつたが、横川氏のフイリップにしろ、都鄕氏のグロリヤにしろ、加藤氏のブーンにしろ、森氏の給仕にしろ、皆すべていゝ出來だつた。然し是は、何も僅かの月日の間に、諸氏の技倆が假く上達したといふ譯ではなく只だ劇そのものが甚だ大アマなものだから に過ぎないのだ。

廊下にて

土岐哀果

巡業

ゆらゆらとバックがうごく、………
ベニスの街も、河波も、サイプラス島も、家の壁も。

イギリス一とふれこみの、
シエクスピアの大一座、――
座がしらのオセロは白く目をむきて、
しやくれたるデスデモナの顔のまうへに、
咽喉もさけむず嫉妬の叫び、
かのまき舌のふるき型。

ゆらゆらと、バックがうごく、………
捲ひてはひろげ、旅より旅へ、
ひろげては捲く巡業の、いつかはげたる泥ゑのぐ、
布のバックのさびしさが、カシオ、ロデリゴ、
エミリアの劍に裾にうごく時、
イヤゴオはせゝらわらへり。

――に

さうです、
あの時ごいつしよにカフエへまで行たのはねえ、
あれは、
あの時あなたが僕の好きなナタリヤに扮したから
なのです、――
どうぞあしからず。

オペラグラス

オペラグラスのさびしさよ。――
さいたわ、さいたわ、鬼三太の、
塵一本もとゞめざる鋏と糊の菊畑。
その花の香の振袖や、
頬のこけたる牛若丸に、

すがりはぢらふ初戀の、皆鶴姫の喉佛。
何かにつけて世の中の、あらのみ見ゆる
さびしさは、
オペラグラスか、——わが心。

工場へ工場へ

飄風

そこの貧乏家の子供達は、皆な家にゐない、
何處へ行つたか。
校舍の庭を探した、ゐない。
栗の樹のある原へも行き、街中を搜したけれど、
やつぱり見えぬ。
けれど其の子供達を見付け出した時、
止め度もなく、
俺は淚がこぼれ、胸がつぶれた。
貧乏家の子供達は、そこの工場の隅ッこに、
職工共に毆られたか、小さくなつて慄へながら、
お互ひに、
塵埃の中で泣いてゐるぢやないか。
あゝ工場へ工場へ。
哀れな貧乏人の子供達よ。
大きな淵に、
大勢の子供が陷ちて藻搔いてる。
空を劈く子供の悲しい叫び聲!
早く助けよ、泣き叫ぶ聲が、
だん〳〵激しくなるばかりだ。
若し棄てゝ置けば、
子供達は死んで了ふ、さもなければ、魚、蟲けら
のたぐひとなるだらう。
溺れぬうち、疾く救ひの網を入れよ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

ワイルドの小話

――アンドレ・ジイドの『オスカア・ワイルド』より――

和氣律次郎

十字架

アリマタヤのヨセフが、夕方カルヴアリ山を下つて基督の死んだ所へ來て見ると、一人の青年が、白い石に腰を掛けて泣いて居た。ヨセフは近づいて、『貴君が悲嘆に暮れてゐるのも尤の事だ。誠にあの人は義しい人であつた』と言ふと、青年は、『私はそれで泣いてゐるのではないんです。私だつて奇蹟を現はし、盲目の目を開らき、癩瘋を醫やし、死せる者を甦生へらせたのです。私は又實らざる無花果の樹を枯らし、水を酒としました。それだのに私を十字架にかけないから泣いてゐるのです』と答へた。

山の神と人魚

昔ある所に一人の男が住んで居たが、絶えず話をして聞かせるので村人に可愛がられてゐた。毎朝この男が村を出掛けて行つて、晩に歸つて來ると、終日働いてゐた村の勞働者は、この男の周圍に集つて來て、『さあ話をして下さい。今日は何んな物を見て來ました?』と訊く。

その男の言ふには、『森の中で山の神が笛を吹いて、小さな山姫達に踊らしてゐるのを見て來た。』『それから何うした? 何んな物を見ました?』と人々が尋ねる。

『濱邊へ行つた所が、波打際で三疋の人魚が、黃金の櫛で綠の髮を梳いてゐるのを見た。』

村人達は絶えず話をしてくれるので、この男を可愛がつた。

ある朝いつもの如くこの男は村を出掛けて、濱邊へ行つて見ると波打際で三疋の人魚が、黃金の櫛で綠の髮を梳いてゐた。尙も向ふへ行くと、森の近

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

くで山の神が山姫達に笛を吹いてゐるのを見た。
その晩村へ歸つて見ると、何時ものやうに村人達が集つて來て、『さあ話をして下さい。今日は何んな物を見ました？』と訊いた。
『今日は何にも見なかつた。』と其男は答へた。

河の戀

ナアシスサスが死んだ時、「野の花」は嘆きに堪へ兼ねて、彼に手向けたいから一掬の水を分けてくれと、「河」に賴んだ。
『まあ。これだけの水が皆涙だつたとしても、私一人でナアシスサスの事を思ふて泣くのにも足らない——私はナアシスサスに戀してゐたんだ。』と「河」が答へた。
『何うしてナアシスサスを戀せずにはゐられやう。ほんとうに美くしい人だつたのね。』と「花」が合槌を打つた。
『美くしかつたかい？』と「河」が訊いた。
『貴君が一等よく知つてる筈ぢやありませんか。毎日毎日堤に横になつては、美くしい姿を水鏡に寫して居たから。』「花」は答へる。
『私があの人に戀をしたのは、あの人が水の上に身體を差し出してゐる時、あの人の眼の中に、私の水の影が寫つてゐたからだ。』と河が言つた。

快樂と悲哀

ある時、青銅でなくては自分の思想を現はすことの出來ない一人の男がゐた。ある日この男に一つの觀念が浮んだ。それは『一瞬間にして消ゆる快樂』といふ觀念であつた。彼はこの觀念を形に現はさねばならぬと感じた、然し人間は全く青銅を消費して了つて、世界中に唯一塊しかなかつた。而かもこの男は、若し自分の觀念を形に現はさないと狂氣になると感じた。その時彼は妻の墓の上の青銅の塊を思ひ起した。それは彼が此世で愛した唯一人の女なる妻の墓の上に、彼が手づから作つた銅像である。それは『永久に滅びざる悲哀』の像であつた。彼は自己の觀念を形に現はす事が出來ないので、狂氣になりさうだと感じた。そこで彼は悲哀の像、『永久滅びざる悲哀』の像を取つて壞して了ひ、それを鎔かして快樂の像、『一瞬間にして消ゆる快樂』の像を作つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

艦底

荒畑寒村

一

春頃、進水式を擧げた二等巡洋艦××號の艤裝工事が、夏に入ると急に忙がしくなり、職工等は寄ると觸ると、近い中に戰爭が始まると、物の怪でも近づくやうに噂し合つた。黑い羅紗服を着た組長や、黑服靑ズボンの伍長等は、日淸戰爭時分、乘組んだ工作船の事を思ひ出して、食後の休憩時間には、必ずト甲板に集まつて、工作船の利益と興味とを語り合つた。

晝飯後、上甲板に費やす十五分か二十分は、艦底の格納庫の艤裝に廻された安田には、何ものにも替へ難い樂しい時間だつた。上甲板には、マストと煙筒の立つべき大きな穴が、幾つか開いて居る限りで、まだ砲塔も、艦橋も、欄干もなく、敷き詰めた木材は泥に塗れて、黑いチヤンは汚らしく流れて固まつて居た。

安田は、烈しい日光を遮ぎる物蔭さへも無い、その上甲板に橫たはつて、痺れる脚をさすりながら、艦長室や士官室の艤裝に廻つて居る連中の話に聞き入つて居た。

「工作船へ乘つて、金が殘られえなんていふ奴ア、嬶がダラシが無えか、手前が賭博が何より好きか、孰ちかだ。」

「賭博ア流行るネ。何しろ工賃は二倍でよ、聰は向ふ任せでよ、小遣ひだけ殘して置いて、後は皆な家へ送つてやれアいゝんだからナ。」

「處で、宛がひ扶持の外にや、食ふ物も飮む物も無し、それに一番毒な女つ氣は更に無しと來てるんだから、小遣ひを使ひたいにも、使ふ途が些ともありやしない。」

「でもよくしたもんだ、大低は嬶がダラシが無くつて、手前が賭博好きと來てるから、幾ら取つたつて殘りつこは無えや。」全くだ！と云はぬばかりに、彼等は聲を立てゝ笑つた。

工作船の話の出る度に、安田は皆な工作船に乘組んで了つて、自分のやうな子供達ばかり工場に殘つたら、後は一體如何なるだらうと、何時も不安の念に驅られるのであつた。

「お前だつて工作船に乘れるとも、木工科は一人殘らず乘組むんだから。お前なんざ何處へ送るつて處もなしよ、一年も乘つて見な、金が殘つて仕樣が無えから。」一度、不安の餘りソツと尋ねた安田の顏を眺めて、笑ひながらこう云つた伍長の語さへも、彼には冷かしのやうに聞へて、心細くて堪らなかつた。

幾棟となく打ち續いた、造船廠の黑い亞鉛屋根の工場と、構內の赭く燒けた地面と、製鑵部の煙突から湧き出る黑煙と、それ等をとり卷いて深く

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

湛えて居る紺碧の海水とは、正午頃の直射する烈しい日光に包まれて、乾燥した大氣の底に銀の如く輝やき、そしてビリビリ顫動して居る。安田は始業の鐘の鳴るまで、吃水線を高く海面に現はして、處斑らに醜く塗られた艦體を、船渠部に近い海上に浮べて居る××號の上甲板から、夢みる如く此の景色を俯瞰して居た。

二

艙口を降りて中甲板に行くと、明り取りの小窓から、かすかに日光がさし入つて、丸いガラスの窓蓋には、日に照された波がギラギラと反射して居る。そこの暗い蔭には、脚氣で仕事の出來ない職工達が、幽鬼のやうな蒼い顏をして、膨んだ脚を投げ出しながら、組長に乞ふて座り仕事をさして貰つて居る。更に艙口を下甲板に下ると、狹い艦底は、幾室にも防水區劃が分れて居て、概ね格納庫に充てられてある。艦底の艤裝工事に當つたものは、皆そこを『穴藏』と呼んで居る程で、眞夏の日光は艦側の厚い鋼鐵板を火のやうに灼き、艦底はまるで蒸し殺されるやうな暑さである。そしてゴミや屑と一緒に、凹處に溜つた水は、腐敗して惡臭を發して居る。それに蠟燭の光りを便りに仕事をして居るので、毒ガスのやうに立ち上る油煙は、身を屈めねば歩けぬ程狹い艙內の職工等に窒息するやうな苦痛を與へた。下甲板には、艙內に空氣を送る爲に、二三臺の電氣扇が取り付けてはあるが、僅かに生温い、熱臭ひ、重く澱んだ微風を、無理に四方に押し流すに過ぎなかつた。

安田は、棚の鐵板を艦側にとり付ける爲に、毎日ハンドボールで艦壁に穴を穿つて居るのであるが、此の「穴藏」に於ける唯一の快樂といふのは、錐が折れるとそれを一纏めにして、一番近い船渠部へ取替に行く事であつた。彼は日に幾度となく、波に全身を浸されて、孤島に打ち上げられた難船者のやうに、汗でビショ濡れになりながら、這ふやうにして上甲板に上つて來た。そして舌を刺すやうな、潮の香の強い、冷めたい空氣を心の儘に吸つては吐いた。それから船渠部の工場に行つて、錐を揃へて貰ふ間、親しい橋場と、大人の眼を偷んでは話し合つた。

『見や、彼の野郎また來て、』橋場とコソコソ話して居やがア。』離れて働いて居る職工達が、冗談半分によくこう罵つた程、彼等は人眼を忍ぶ若い戀人同志のやうに話し會つた。

「工作船なんかへ乘るもんじやないョ。皆な賭博をしたり、喧嘩をしたり、恐ろしい事ばかりして居るんだぜ。」橋場は潤んだ、考へ深そうな眼をして、安田を見詰めながら云つた。そして鑢で錐

の頭を尖らしながら、絶えず咳をして居る。安田はこんな透き徹るやうな顔色をした、弱々しい少年が、如何してそんな事を知つてるんだらうと怪しんだ。

「それア、工賃だつて倍も取れるさ。だけど工作船は戰地へ行くんだぜ、もし敵彈が當つたら如何する？……。そんな時ア君、如何する？……。僕アいつでもそう思ふんだ、戰爭だの、喧嘩だの怪我だので死ぬなんて、ホントに厭だ。僕は靜かアに、誰も居ない處で、自分獨りで色んな事を思ひながら死にたいんだ……。」

安田は橋場の話を聞いて居る中に、苦しいほど胸が迫つて來た。橋塲の蒼白いやせた顔を見たり絕へずする咳を聞いて居て、そしてこういふ話を聞くと、明日にも橋塲が、靜かに、誰も居ない處で、獨り色んな事を考へながら死にでもするやうに想はれて、堪らなく悲しくなるのだつた。

「だつて君、工作船へ乘る者が、そう恐ろしい事ばかりするなんて、如何して知つてるんだ。」橋塲は安田のこの問には答へないで却つて安田に問ひかけるやうな事を云つた。

「だつて厭じやないか。あの××艦にしたつて、辛と立派に出來上つて、すぐ戰爭に出たとするだらう。それが大砲だの、水雷だので、大きな穴が開いたり、マストが折れたり、煙筒が裂けたりして、引き返して來たとして見給へ。君、平氣でそんな慘たらしい傷が癒せるか？……。」

二人は眼を上げて、丘陵の横はつたやうな××艦の姿を眺めた。大きなクレーンを据え付けた船は、赤く塗つた大きなマストを艦上に曳き上げやうとして、ズック製の油じみた、ダブダブした上衣を着た數十名の職工等は、艦上から太い綱を曳いたり、叫んだり、馳せ廻つたりして居た。舷から吊り下げた板の上に腰をかけて、艦側を塗つて居るものもあつた。赤や白のペンキの色が、膏薬のやうに汚なく、大きく艦體を彩つて居た。

『もうぢき、砲が据えられるネ。』安田はこう云つて橋塲を顧みた。上甲板には、砲塔を据付ける職工に交つて、作業服を着た海軍士官等が立ち働らいて居た。艦側に開いた砲門から身をのり出して、ハンマアを揮つて灼けた鋲を打ち込んで居る半裸の勞働者もあつた。

「もう半月たつて見給へ、灰色に染られた、立派な軍艦が出來上つて了ふから。だけどたつた一發、彼處に水雷をくつて見給へ、あの大きな艦體も、大砲も、人間も、皆な海の底へ沈んで了ふんだからネ。それア、五分と經たない中だそうだヨ。」橋塲はこう云つて、赤く塗つた吃水線を指した。その大きな、深い海のやうな色をした眼には、深くものに驚いた少年の心があつた。

三

晴れ切つた、暑い日は幾日となく續いた。長く一列に並んだ職工の群は、重い鐵板を載せて行く荷車が通る度に、舞ひ上り立ち登る、黄色な、熱い埃に咽んで居た。

列の中ほどに安田も交つて、健康診斷の順番の廻つて來るのを俟つて居た。彼は脚氣がまだ快くならない上、心臓も幾らか惡いと見へて、些し働らいてもすぐ息切れがしたり、動悸がしたり、時には呼吸が一時に止つて了つたかと思はれるやうな、烈しいショックを胸部に感じて、ハッと立ちすくんで了ふ事さへあつた。單調な、そして苦しい「穴藏」の仕事は相變らず續いては居たが彼の唯一の樂しみであつたハンドボールの仕事は無くなつて了つたので、今はもう前のやうに、自由に日光を浴び、空氣を呼吸する事も出來なくなつた。それ許りでなく、毎日毎日、ほとんど日課のやうにして居た橋場と會ふ事さへも、今は全く絶へて了つて、電氣扇の熱臭ひ微風と、暗黒の中に毒のやうに油煙を吐く蠟燭の光りと、溜り水と塵芥との腐れ合つた惡臭と、間斷なしの單調な勞働とのみが、終日、彼に附き纏つて居る友となつた。

安田の後には足を水腫病者のやうに張らして、黄い、光澤の無い顏色をした一人の職工が、靑竹に縋つて、立つたり、シャガンだりして居た。脚氣患者は大低、靑竹や杖に縋つて造船廠の門を潜つては、組長だの伍長だのに泣くやうにして頼んで、容易い座り仕事をさせて貰つて居た。安田は頸を伸して、列の後の方を見渡した。すると、自分から十人許り後の處に、橋場が立つて居るのを見出した。

橋場は今日、いつもより殊に蒼白い顏をして、やせた頬は消耗熱の爲めにうすく紅でも刷いたやうに紅潮して居た。脊服の胸を開けて、ポケットに兩手をつゝ込んだ儘、考へ深さうな眼を何ものかに向けて立つて居たが、その頸に卷いた汚れた手巾が、いかにも暑苦しさうに見へた。

「ハ……シ……バ……」安田は兩手を口の邊にかざして、小さい聲で呼んだ。すると、吃驚したやうに此方を向いた橋場は、いつものやうにニッと笑つた限りで、今度はまたザーッと安田の顏を見詰めて居る。安田がまた頸を伸して何か云はうとした時、列はゾロゾロ動き出したので、後をふり返りふり返り、人に押されて歩いて行つた。

診察室は、守衛の控所を假りに用ひたので、二人の海軍々醫が一人一人診察する傍では、一人の看護手が姓名を記すやら、病症を記入するやら、汗を拭く間もない位ゐ多忙を極めて居た。職工の健康診斷は、一年に三回乃至四回は必ず行はれる例で、年を追ふて勞働者に肺結核が增えるため、その有無を檢査するのであつた。そしてもし些しでもその徴候がある者は、その日から直ちに解雇されるのである。

『人を馬鹿にしてやがる、肺病だつて心臓病だつて、好き好んでなつたんじやねえ。皆なこゝの仕事のお蔭だ、埃と煤を吸つて、十日もブッ續けて

徹夜なんかさせられたお蔭だ。やめるんならやめるでいゝから、此の病氣を癒して吳れ。女房や子の食へるやうにして吳れ。』そう云つて泣いて暴れる職工を、守衛等が笑ひながら引つ立てて行つたといふ一つ話を、安田はよく他の職工から聞いたことがあつた。

やがて安田等の番となつた。若い軍醫は一と通り安田の體を診終つた後、指先で半裸の體を押しやりながら、

「些し心臟が惡いやつです……それに脚氣も……。」と云つて軍醫長を顧みた。

「肺は無いかネ、肺は？……。でなきやいゝ、心臟は傳染せんからネ」軍醫長はふり向きもせず、一人の職工のやせた胸を、念を入れて打診しながら云ひ放つた。

安田は靑服に手を通しながら外に出た。彼は心臟が惡いと云はれても、脚氣が惡いと云はれても悲しいと思ふやうな感は些しもなかつた。只だ、『肺でさへなきやいゝ、心臟は傳染しやしないから』と云つた軍醫長の言が無暗に癪に障つて、平素は弱い彼の心も、どうされても構はぬ、ウンと罵つてやらうかと思つた位ゐ亢奮して居た。彼は泣いて暴れたといふ職工の事を思ひ出した。そして嶮しい眼をして硝子窓越に軍醫長を睨みながら吾れ知らず『人を馬鹿にしてやがる』と叫んだ。

地上に大きな蔭影を劃して居る製鑵工場の棟を離れると、彼はもう何時だらうと思つて、港務部の時計臺を仰いだが、やゝ傾むいた太陽の光は、烈しく大時計の硝子に反對して、眩しいばかりで何も解らなかつた。

安田が一日の勞働を終つて、××艦の舷上から陸地に架け渡した假橋を渡つて來ると、恰ど船渠部の工場の前に、橋場が此方を見て立つて居た。

「如何だつたい、今日の診察は？……。軍醫長の野郎、隨分人を馬鹿にした奴だらう？……。」安田が息忙しくこう問ひかけると橋場はいつものやうにニッと笑つて、

「僕はもう明日から工場へ來ないヨ、君とももうお別れだ……。僕の肺はもうすつかり腐り切つちやつてるんだつて、『こんな體をしてよく生きて居るナ』つて軍醫が驚いて云つてたヨ。生きてる處か、毎日働らいて居るんだもの、ねエ……。」と云つた。そして更に聲を上げて笑つたが急に烈しく咳き出して、暫らく安田の肩につかまつた儘、絕へ入るやうに苦しんだ。

「で、君はこれから如何するんだイ。」安田は橋場の體を支へるやうに、背後に腕を廻しながら、靜かに門の方に歩んで行つた。

「國へ歸らうと思ふヨ。僕はこゝへ來て、三年の間にこんな體になつて了つた。」肺が悉皆腐つて居るといふ恐ろしい事をさへ、平氣で話して居た橋場は、沈んだ調子で囁くやうに云つた。

ショウ劇梗概

堺利彦

■バーナード・ショウの劇は、今日までに本になつて居るのが十八ある。最初一八九八年に生たのが「愉快劇及不愉快」といふので左の通り。

愉快劇(Plays pleasant)

貧民長家(Widwers' houses)

女たらし(The philanderer)

ワアレン夫人の職業(Mrs. Warren's profession)

不愉快劇(Plays unpleasant)

武裝と人(Arms and the man)

カンヂダ(Candida)

運命の人(Man of destiny)

分る者じやござゐません(You never can tell)

■此中「貧民長家」は「谷川の水」といふ別名をつけて私が譯した。「賣文集」の中に收めてある。「ワーレン夫人の職業」はタシカ「新思潮」といふ雜誌に譯載せられた。「カンヂダ」も「兼子夫人」といふ題で何かの雜誌に出た。「運命の人」は楠山正雄氏の譯で、文藝協會で試演せられた。「分る者ぢや御座いません」は「廿世紀」といふ外題で、同じく文藝協會が先月有樂座で興行した。譯者は松居松葉氏。「武裝と人」は即ち本誌前號で私が紹介した。

■次に一九〇一年に出たのが「清教徒に對する三劇」といふので、左の通り。是はまだ一つも譯されて居ぬらしい。

惡魔の門弟(The devil's disciple)

シーザーとクレオパトラ(Ceasar and Cleopatra)

ブラスバウンド大尉の改宗(Captain Brassbound's conversion)

■次に一九〇三年に出たのが

人と超人(Man and superman)

といふので、是こそショウの生命哲學を示したものだと云はれて居る。是は早稻田大學の誰やら氏の手で反譯中と聞いた。私も譯して見ようと思ひ立つては居る。

■其以後の作は左の通り。

アイルランド(John Bull's other Island)

バルバラ少佐(Major Barbara)

女の夫を欺した(How he lied to her husband)

ドクトルの板ばさみ(Doctor's dilemma)

結婚(Getting married)

ポスネツトの露現(Shewing-up of Blanco Posnet)

新聞切拔(Press cutting)

感嘆すべきバシユヴイル(Admirable Bashville)

■此中「ポスネツトの露現」は「馬泥棒」といふ題で森鷗外氏の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

手に譯され、新時代劇場で演ぜられた。が私は見なかつた。「女の夫」はイツ先達て「太陽」に載つた。「新聞切拔」は「新日本」に載つた。然し此の三つは皆短い一幕物、跡のは皆可なり長い。外にもまだ譯されたのがあるかも知れぬが、私はまだ聞かぬ。

■以上の外、まだ本にはならぬので、倫敦で興行せられて居るのが二つばかりあるらしい。其の一つに就いては先日朝日新聞に與謝野鐵幹氏の通信が出て居た。それに依つて想像すると、ショウの青年時代の小說「非社會的の社會主義者」(Unsocial socialist)を脚本に作り直したものでは無いかと思はれる。此作家が古い小說を脚本に作り直した例は外にもある。右に擧げた「バシユヴイル」もそれである。「非社會的社會主義者」は「錐の穗」といふ題で、私が曾て日刊平民新聞に半分ほど譯した事がある。今一つの近作はショウが匿名で出したのだと云ふ樣な事が何かにチヨツと書いてあつた。

■一體、ショウの研究は容易な事ではない。右の諸作の本文の外、序文や附錄がコテ〳〵ある。時としては序文の方が本文よりも遙かに長い。それだけ研究の便宜は多いが、それを一通り讀むだけでも中々である。猶此外ショウの文藝的著書を擧ぐれば、凡そ左の通り。

演劇評論集(Dramatic opinions and essays)
美術健全論(Sanity of art)
イブセン神髓(Quint-essence of Ibsenism)
ワグネル論(Perfect Wagnerite)
糸のもつれ(小說)(Irrational knot)

■そこで私の樣な者が、迚も是を皆讀み盡して十分に嚙みこなす事は出來そうにも無い。今の所ではまだ半分も讀んで居らぬ然しひま〳〵に少しづゝ研究はして見る積りで居る。ツマリ此梗概を書くのは其の研究の一つの方法で、云はゞ近代思想が私の草紙になる譯である。此段發行者と讀者とに御勘辨を乞ふ。

■猶ショウが歐洲劇壇に於ける第一流の作家として持てはやされて居る外に、英國フエビアン派社會主義の著述家兼運動者として、極めて有力の人物である事は、本誌の讀者の既に熟知せらるゝ所であらう。

■其中、梗概の外に、此の劇作者、此の社會主義者の小傳をも載せたいと思うて居る。ショウの眞似では無いが、前文が大變長くなつた。

新聞切拔

前に記す通り、此作の反譯は數月前の「新日本」に載つて居る。如何にも譯文はマズいが、忍耐力のある方は御覽なさい。

一體此作は一九〇九年の七月に初めて倫敦で演ぜられたので、「日刊新聞の論說及び雜報より拔萃して拵へた時事問題の小品」とショウ自らが云つて居る。勿論大して身のある物では無いが、輕い所を一つ見て置くも好からうと思ふ。主なる材料は婦人選擧權運動と新徵兵制度案とである。英國の時事問題に善く通じて居らぬ我々には、細かい點に於ける色々皮肉な興味を見のがすであらうと思はれるが、それはドーモ仕方が無い。登場者の人名は大抵實在の人名をモジつて居る。大將キチナーをミチナアとし、首相アスキスをバルスキスとしたるが如き、即ちそれである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

時は今より三年後の四月一日の午前、ミチナア大將が陸軍省大臣室で机に向つて書類を見て居る。『婦人に選擧權を與へよ！』といふ叫聲が外から聞える。大將はビツクリして、机の抽出からピストルを攫み出したが、別に何事も無いので、又それを置いて仕事に掛る。そこに從卒が入つて來る。不平そうな、一向軍人らしくない青年である。

從卒は、玄關の靴拭に婦人選擧權運動者が自ら其身を鎖で縛りつけて駄々をこねて居る由を報告して、一通の手紙を大將に渡す手紙の中には鍵が入つて居る。そして其鍵で婦人運動者の鎖を外して、内に入れて面會して吳れといふ、首相バルスキスの手紙の文言である。

それで大將が其由を從卒に命ずると、從卒は婦人をコワがつて、どんな目に會ふかも知れないから否だといふ。大將は嚇となつて、『貴樣は命令に服從せんか。よしんば殺されたつて何だ。國の爲に死ぬるは軍人の義務だ。廻れ右前へオイ！』

從卒考へながら出て去る。「婦人に選擧權を與へよ！」「婦人に選擧權を與へよ！」といふ聲が又盛んに聞える。ミチナア大將は其聲の眞似をして、「婦人に選擧權を與へよ　兒童に選擧權を與へよ！　赤坊に選擧權を與へよ　猿に選擧權を與へよ！」と云ひながら敵の來襲を待つ。

婦人選擧運動者入り來り、直ぐに着物を脱ぎにかゝる。大將が呆れて居ると實はそれが首相バルスキスである。婦人選擧運動者が市中に充滿して居るので、こんな變態をするより外にこゝまで來る方法が無いのだと、首相が嘆息する。何故電話を掛けないかと、大將が問ふと、電話もスツカリ彼等の手に落ちて居ると答へる。

一体何の用で來たのかと大將が問ふ。政務次官サンドストーンが辭表を出したと首相が答へる。「ナゼ？ 何うして？ 戒嚴令を出して置て辭職する奴があるものか」「でも實行が出來ない」「何うして出來ない」「だつてウエストミニスタア寺院を中心にして、それから二哩の周圍に哨兵線を張つて、婦人を皆んな其外に追出して了もうナンテ」「好いぢやないか、實に巧妙な戰術ぢや無いか」「だつて婦人が聞きやしない」「聞かなきや鐵砲で擊つちまへ」「眞逆婦人を擊てもしない」「何アに、女でも擊てば矢張り死ぬるよ」「だつて、そんな事しちや輿論が聞かない」「輿論なんて云ふ者があるもんか、グズグズいふ奴等は擊つちまへ」「だつて、それらや次の選擧が」「選擧なんぞ止して了へ、國會も廢して了へ、グズグズして居りや何れ君等は勞働黨にやられて了ふんだ」

首相バルスキスは大將の肩に手を掛けて

「君マアそんな事を云はずに、サンドストーンに代つて政府を助けて吳れ」と云ふ。「イヤ何うして、サンドストーンは去年强制

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

徴兵法を拵へた程の人氣者ぢや無いか』『所が、あの新兵虐待事件、ジエンキンソン中尉が坊主の子に靴を嘗めさせたと云ふ事件で、新徴兵法は散々の不評判だ』「坊主の子だつて軍隊に來りや矢張り兵卒ぢや無いか」「所が、あの坊主の叔母は三人とも貴族だ、リチモンド夫人も其一人だ」「ソーカ、そりや大變だ、ジエンキンソン中尉は何と云ふ馬鹿な奴だらう。ぢや彼奴を撲つて了へ』『所がミチナア、其ジエンキンソンの親爺は我黨の基本金を百萬磅出してる。何れ貴族にしてやらなくちや成らない。何しろ君は一つ禮服を着けて、リチモンド夫人の處に詫に行つて呉れ。」

そこに又『婦人に選擧權を與へよ！』といふ叫が聞える。續いて轟然たる爆發の響が聞える。それは婦人連が花火を揚げて、『婦人に選擧權を與へよ』と赤字で書いた無數の紙片を空中に撒布したのであつた。

此時フト首相が思ひだして「獨逸ぢや又ドレツドノートを四隻拵へるそうだ」と云ふ「ぢや此方は十二隻拵へるんだ」と大將は云ふ。「所が其金が大變だて」「そんな事を云つて居て、今に獨逸に來襲されて償金の五千萬磅も取られたら猶更大變ぢや無いか」「だつて君等は、徴兵法さへ出來れば敵國來襲の虞は無いと云つたぢや無いか」「何アに益々あるよ、獨逸の嫉妬心が高まるから」「一體獨逸はナゼ來襲するのだらう」「それより外に軍隊の用事が無いぢや無いか」「我々は獨逸の來襲なんて考へた事も無いが」「我々は十年以來それより外に考へた事が無い。此の海上權力が天然に英國に屬して居る事を彼奴等に思ひ知らせてやらなきや駄目だ」「だつて思ひ知らなきや仕方が無い」「だから擊つのさ。獨逸人でも擊てば矢張り死ぬるよ」「だつて向も鐵砲を持つて居るよ」「そんな事を云ふ奴を軍隊では卑怯者と呼ぶのだ」

こんな事を話して居る所に副官が入つて來て、婦人選擧權反對同盟會々長及幹事の來訪を首相に告げる。首相は應接間に出で行く。

二

跡に大將は臺所方のフアレル夫人と云ふを呼び寄せて、是から大切な用事で出て行くから、大禮服や勳章を揃へて呉れと賴む。そして、昔はこんな世話をチヤンとして呉れる兵卒があつたのだけれど、徴兵法が出來てからスツカリ女任せになつて了つたと愚痴をこぼす。所が大禮服は、臘細工の軍事陳列館に出品したから今此處には無いと云ふので大將大いに困る。

それから話の序にフアレル夫人は、サンドストーン大將に怒鳴りつけられるには困ると云ふ。するとミチナア大將は『八度も戰場の危險を冒した人物だから、少々無作法な言葉使ひぐらゐ許してやらなくちや』と云ふ。するとフアレル夫人は『ちや八度も產蓐の危險を冒した私も威張れる筈です』と云ふ。『戰場の危險はそんな危險とは譯が違ふ』『いゝえ、人を殺すのと人を產むのとは比べ物になりませぬ』『そんな事を云ふと、女に戰をさせ

ろが好いか』と威す。『そんな事を仰つて、女が戰で死んで了つたら人種が盡きるでせう。あなたに子が産めますか』とやり返す。『成程あなたは實にエライ婦人だ』と大將是で大いに感服する。

そこに從卒が來て、先刻の婦人選擧權反對同盟會のコリンシア女史とバンガア夫人とが大將に面會を求めると取次ぐ。ファレル夫人は出て行く。大將甚だ機嫌が悪く散々に從卒を叱りつけて、「貴様の樣な奴は兵隊の面汚しだ」と云ふ。從卒も腹を立てゝ「兵隊なんぞになるのは私の面汚しです」と云ふ。大將はいよ／＼機嫌をそこれて、例の「氣を付け！廻れ右前へオイ」をやる。從卒は益々ふくれて「馬鹿々々しい、人間が廻れ右前へオイなんて號令を掛けられる。是が只の國民であつたら　あなたの頭の一つぐらゐ撲つたつて二十圓ばかりの罰金で濟むんだが、私は兵隊だと云ふので、同じ事をしても二年の懲役にブチこまれる。有難い仕合せだ。」

こんな事を云つて居る所に二婦人が入つて來た。バンガア夫人は男の樣に逞ましい四十ばかりの婦人、コリンシア女史も卅以上だが、是は中々氣取つた美人。從卒出で去る。

こゝで二婦人、殊にバンガア夫人が大氣焔を吐く「一体、男と女が爭ふのはフザけて居て駄目です。だから婦人選擧論者には我々が對戰する覺悟です。婦人の要する者は選擧權では無くて兵役の樣で　。此問題はビスマルクの云つた通り、鐵と血に依らなければ解決が出來ない。ビスマルクはあれで女の化けたのです。總て歴史上の英雄は皆女の化けたのですポレナオンだつて、アレが本統の男であつたら、あんなに女に對して邪慳には出來なかつた筈です。誰が見てもエリザベス女王は男の化けたのです。私は今に此の裳を脱ぎ棄てゝ馬に跨り、劍を拔いて婦人選擧權反對論者を指揮して見せます。」

ミチナア大將が之を聞いて呆れて居ると、「男なんてものはそれだから仕方が無い。私は是からサンドストン大將に會つて、若しか弱い音を吹いたら承知しない」と、バンガア夫人出で去る。

跡は美しきコリンシア女史の氣焔。『婦人選擧論者などは、あれは皆ダラシの無い女です。綺麗で利口な女と云ふ者は……』

「例へばアナタの樣な」と大將が少し氣色ばむと、女史はピストルを大將に差し向けて「今一歩側に寄ると命はありませんぞ」と云ふ權幕で、「バンガア夫人は女裝した男ですが、私は何處までも女です。女は女ですが、男を使つて世界を支配する女です。男は何時でも美人の爲に支配されて居ます。婦人選擧權論者は支配者の地位から選擧者の地位に下らうと云ふのです。世の中は何と云つても美人で無くちや駄目です。婦人選擧論者だつて、評判の好いのは矢張り美人だけです。あの美人等が群集に媚びて居るのです。」

『ではどうしてもアナタは婦人の手で國を支配しようと云ふのですか』『ソウです、或る婦人の手に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

依つて、才色兼備の婦人の手に依つて』と、コリンシヤ女史微笑を含んで大いに濟ます。『イヤ是ではバンガア夫人の方がまだ増だ』とミチナ大將は避易する。

三

こゝにバルスキス首相が入つて來る。コリンシア女史はサンドストン大將に會ひに行くと云つて出て去る。從卒が慌てゝやつて來てバンガア夫人がサンドストン大將の部屋の戸を内から閉めて、婦人を軍隊に入れるの宣言を得なけりや承知しないと迫つて居ると報告する。ミチナア大將は驚いて應援に出かけたが、直ぐに戻つて來て「モウ駄目だ、サンドストンはバンガア夫人を鎭撫する爲に結婚を申込んだ。多年理想したる眞の軍人的婦人を得たと云ふのだ。英國の陸軍は今後バンガア夫人に依つて支配されるのだ。實にやり切れない」と嘆息する。

それから今度はミチナア大將が負けぬ氣になつて、フアレル夫人に結婚を申込む。バンガア夫人と對抗するに足るべき婦人は外に無いと云ふのである。フアレル夫人は、結婚したとて矢張り臺所方で給金が貰へなくなるだけ損だなどゝ云つた末、結局申込を承諾する。

すると今度は又コリンシア女史が出て來て首相バルスキスに挑んだりする。そこに從卒が口を出して「大將、此お祝に私を軍曹にして下さい」と云ふ。すると大將は「貴樣にや軍曹は勤まらないから、少尉にしてやる。」といふ。從卒大喜びで出て去る。

最後にバルスキス『して見るとミチナア君、君はツマリもう兵卒を小供の樣に扱ふ流義をやめたのだね』と云ふ。ミチナアは之に對して『して見るとバルスキス君、君はツマリもう婦人を天使の樣に扱ふ流義をやめたのだね』といふ。そこでフアレル夫人が『お二人ともソウお分りになれば何より結構です』といふ。

▲次號より「人と超人」の全譯を連載す(編者)

■次號豫告■

□近代佛文學管見(評論)　大杉榮
□社會進化論(マアテルリンク)　荒畑寒村
□人と超人(ショウ劇)　堺利彦
□短歌　土岐哀果
□未定　安成二郎
□蒼い眼(小說)　伊庭孝
□小說(アナトル・フランス)　大杉榮
□ザイツゲン(研究)　小原三

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

賣文社より

渋六

■此頃チョイ／＼珍らしい手紙や珍らしいお客が來る、春めくとまでは行かぬが、小春日和に山茶花の咲いた位の趣がある。賣文社には今山茶花が咲いて居る。日あたりの善くない、頗る陰氣な庭ではあるが、せめて此花に依つて多少の風致が生じて居る。珍客珍書の事は發表せぬ。

■大石榮子さんからの手紙に「ナショナルの三の百ページの處までこぎつけました」とある。そして、此頃世間でよくノラが滑つたの、イプセンが轉んだのと云ふから「人形の家」を貸してほしい、マグダだけは讀んだ、と云つて來た。「○といひ○○といふも我ありて後にはじめて價いできぬ」といふ與謝野寛氏の短冊を床柱に掛けた、あの瀟洒な小家を思ひだす。

■神戸夢野村の小松春子さんから、二月に一度の諫早の消息が今度は大變に晩いがと、ひどく案じた手紙が來た。あの丸顔の可愛らしい人が只ひとりで、庭鶏を飼つて居る樣が想はれる。

■私が「新佛教」に連載して居る、カウツキーの「唯物論の倫理」は、十二月號で完結になるので、來年一月には一冊の本にして出す筈。「社會主義の倫理」といふ表題にしたッて可いだらうと思つて居る。

■私は又此頃キリアム、モリスの「ニュース、フロム、ノーホエア」の反譯を思ひ立つて居る。是は曩に私が抄譯して「理想郷」と題した者です。モリスは元來卓越せる美術文藝の人であるので、本書の中、政治に關する部分三四十頁を除けば、跡は殆んど純粋なる文藝の著作として見る事が出來る。私は今度其意味に於て全譯を作らうと思つて居る。「新佛教」の正月號から連載の筈。

■今賣文社に直接關係して居る人は、高畠素之君、小原愼三君、相坂佶君。相坂君はツイ此間大赦で出て來た人。小原君は同志社文學部を出た人で、其癖基督教に少しも染まずに居る人で、マルクス派の立場から社會學の方面を專攻しようと云ふ志しの樣に見える。高畠君は同じく同志社の神學部の脱走連で、今はマルクスの資本論に心を潛めて居る。是は蓋し高畠君の生涯の事業だらうと思ふ。

■賣文社で毎月一回茶話會をやつて居る。大抵二十人餘り來會者がある。別に面白い事も無いが、面白く無い事も無い。十二月は三日の晩にやる。そして年末には別に忘年會をやる積り。

大久保より

榮

■「賣文社より」にもあるやうに、小春日和のせいか、今迄土の中にもぐり込んでゐた蝮共が、そろ／＼と這出て來る。地方からも讀者が三人ばかり訪づれて來た。一二年ちつとも顔を見せなかつた在京の友人も二三人やつて來た。君も蝮だなと云ふと、蝮は可哀相だ、僕なんぞは青大將位の處さと云つて笑つて行つた人もある。

■中にはアナーキズムを研究したいから、其の料材を教へてくれなどゝ云ふ危險人物も來る。手紙にもそんなのが二ッばかりあつた。僕等の處では蝮や青大將は大いに歡迎する。又こんな風な其の卵も大いに歡迎する。けれども餘んまり無茶な事を云つて來る人に對しては、少々敬遠せざるを得ない。初會やそこらの御客と一寸心中はしかねるからね。

■先月の末に寒村と二人連で横濱へ出掛けた。そして偶然、濱邊を散歩してる白耳義の紳士と支那の淑女とに出會つた。二人ともソシアリストだ。紳士はセンデカリスム

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

の事などを話す。淑女は張繼の消息などを聞かす。久しぶりで橫文字で吃つて見た。歸りに品川の電車の終點の處で、ある繩暖簾に入つて、色の白いこわ飯と砂糖氣のない餅とで夕飯をすました。

■小原愼三と岡野活石とが大枚十二圓とかの家賃の家を借りた。毎朝座敷の眞中で小原が味噌をすりながら、オイ活石、水を一杯持つて來いよ、などゝ遣つてゐる。處がある日、活石が提案して何にかお頭付の肴が食いたいとなつて、小原がお使者にたつて、秋刀魚の長いのを五六本買つて來た。小原の事は同人の間に同志社文學士の稱がある。家は四谷區右京町三。猶小原は此家で英獨語教授を始めるよし。

■いつだつたか、寒村と二人でカフエー、パウリスタで晝飯を食つてると、やがて紳士が二人入つて來て、其の中の一人がヤアと聲をかける。見ると堺だ。變り色のチヨツキに靑い縞シヤツを着てる處なぞは、お連の蓄音機の同僚と相並んで、些かの遜色もない。尤も實は日影町から、しかも月賦で買つて來た其の洋服の素性は人に知れないものとして。

■六十日はもたん筈の高畠のノギ君が、日増に丈夫になるので、お父さん大いに失望？して、大ぶアテが違つて來たよとコボしてゐる。

■元來少し吃りだつた相坂佶は、出獄した翌日から急に啞のやうになつて、丸つきり物が云へなかつたのが、此頃は少し口もきけるやうになつた。

■折角大赦の德を頌して置いた處が、此の頃は又例の大演習で大ぶ警戒がお嚴しい。僕は三太夫を二人連れて廣告取に歩いてる。車にでも乘らうものなら、車が三臺續いて走る景氣になる。それに銀座にゐる野澤重吉の車にでも乘らうものなら、野澤のお供までが後に續いて、四臺で走る大景氣になる。

■しかし景氣の善いのも善いが、そんなお供付ではさき様で困る家がある。やむを得ず昨日はまいてやらうとしたが、遣りそこなつて漸く半分だけまいた。今日はうまい具合に途で二人ともスツポぬかして了つた。寒村も切りにまく。（十一月十九日）

■毎度ながら次號豫告が狂つて困る。こんども亦、僕の近代佛文學瞥見と高畠の社會進化論とが拔けた。寒村は始め徹底をよして、逃避者と老人と青年と云ふ題の頗る面白い小説を書いて來たが、少々怪しからんものなので、殘忍ながら沒書にした。實は前二號の近代劇論なども、善いところは皆んな削つて了つたのだ。お上の檢閲官よりも、ウチの檢閲官の方が餘つぽど嚴しいのだからねえ、と寒村大いに憤慨してる。

■今日は印刷所へ原稿を持つて行かうと思つて、朝からいろ／＼原稿の整理をしかけて、一寸近所の親戚まで用足しに出掛けると、停車場附近は大變な人だかりだ。ふとさう／＼今日はミカドのお歸り遊ばす日なんだと頭に浮ぶや否や、後ろから尾いて來た二人の男が、署長の命令によつて檢束しますと云ふ。半日警察に幽められたお蔭でスツカリ風を引いて了つて、頭痛はする、咽喉は痛む、有りがたいわけさ。

■安成貞雄とう／＼小説の批評を持つて來ない。もう一度誰れかにうは言でも云はせるかな。ほんとうにあんな賴み甲斐のない男たらありやしない。（十一月二十日）

■轉居■

四谷區須賀町二二

賣文社　堺利彥

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

新刊紹介

■黎明期の文學（相馬御風著）

所謂早稻田派の批評家の中で、僕は相馬御風氏と本間久雄氏の文章を好んで讀む。二人とも割合に多くの社會的背景を其の文學批評の後ろに置いてゐる。そして此の意味で僕は「黎明期の文學」の中の「正宗白鳥論」を最も面白く讀んだ。

白鳥氏は平素僕等の最も同情する、そして同時に最も嫌惡する頽廢的生活の描出家として定評を得てゐる。

今日の社會では無學者も智識者も、あらゆる生活の壓迫の下に、或は無自覺的に或は自覺的に、生活に苦痛し悲哀し倦怠し絕望して、何等の希望もなく興味もなく、只碌々として生きてゐるものが多い。これは爭ふ事の出來ない事實である。殊に文學者の中には時として斯う云ふ生活を誇りにしてゐるものすら見受けられる。そして此の所謂頽廢的氣分が、いろ／＼な形式によつて近代文學の上に描き出された。

御風氏に據れば、白鳥氏は一方に無學者の間の「精神的に彼等を動かす何等の理想も何等の信念もなく、又物質的に彼等を動かす何等の積極的な強烈な欲求のないヽヽヽ沈滯腐敗のヽヽヽものぐさの生活ヽヽヽあきらめ生活」を描くと共に、他方には智識者の間の「在來の道德、在來の理想、在來の宗教、其他ありとあらゆる精神的向上に對して、何等の信賴をも何等の希望をも感じてゐないヽヽヽ他に對しても自らに對しても何等の義務も責任も感じてゐないヽヽヽそして世間に對して否定的な、冷笑的な、そして呪咀的な」、尤も多少の反抗的破壞的の氣分はありながらも、現在の醜い「生活を脫し得ず又脫しやうともしない停滯的生活」を描いてゐる。

そして又御風氏の結論に據れば、白鳥氏は「此の不徹底極まるヽヽヽ不充實此の上もない、憐れむべく呪ふべく憎むべきヽヽヽ日本と云ふ國に於ける日本人と云ふ種族の生活の眞相」を描き得た、他に類のない作者である。「私達は正宗白鳥氏によつて日本人としての私達の現在の生活に戰慄を得た。此の戰慄の「創造」こそ、藝術家としての白鳥氏の最も大なる事業である」と云ふ。

けれども僕は、斯う云ふ批評や作物を見る度にいつもさう思ふ。文藝批評家と云ふよりも寧ろ文明批評家だとまで云はれてゐる人達が、何故現在の表面の社會事實のみを捕へるだけで、そして此の事實の奧に橫つてゐる原因に遡る事を敢てしないのだらうか。それから或は此の原因を知らずに、或はボンヤリと知つて、或はハッキリと知つて、そして積極的に現在の生活に反抗して行く事實を、何故其の論題とし、又は題材とする事を敢てしないのだらうか。尤も其の書に題して、わざ／＼「黎明期の文學」と云つてゐるものに、こんな注文をするのも無理かは知らないが。併しいつまでも／＼夜あけばかりの世の中ぢや仕方がない。日は既に高く昇つてゐるんだ。それを十時になつても十一時になつても、まだ寢床の中にもぐり込んでゐるんだから困る。

猶此の書は、明治四十一年から四十五年に亘つて、あちこちの新聞雜誌に載せた二十餘の論文を集めたものだ。ふつくりした文章の、理解の深い觀察の、會心して讀むべきものが多い。（金八拾五錢、麴町區飯田町新潮社）（榮）

■歐米株式活歷史（福澤桃介著）

近代の社會では、如何にして金を儲くべ

きかと云ふ事が、最も重要な事になつてゐる。其處に近代社會の長所もあり短所もある。其處に近代社會の成因もあり壞因もある。要するに其處に近代社會の謎の秘鑰があるのである。

尤も金を儲けるにもいろ／＼な方法がある。けれども其の神髓には必ず多少の投機的傾向がある。そして誰れでも多少の金を儲ければ、必ず皆最後に本當の投機に走つて行く。投機はあらゆる金儲け方法のアルフアであると共に又オメガである。從つて投機は近代社會を説明する最も明白なそして最も雄辯な縮圖である。

此の意味に於て僕は、福澤桃介氏の近著「歐米株式活歷史」を、非常な興味を以て讀んだ。桃介氏は株式界の實際の大達者である。そして此の本は、經濟學の學者が變てこな庇理窟を並べ立てたのとは違つて、株式界の事實の有りのまゝの告白である。しかも其の概觀と云ふよりも寧ろ個々の事實の詳述である。まれに理窟は云つても、アールヂオアむき出しの飾りのない理窟で却つて其處に多大の暗示がある。

紐育倫敦巴里伯林の各取引所を詳述した「歐米株式取引所の組織」の章は、先づ順序として讀まなければならぬものだらうが僕は之れをあと廻しとして「米國操り手段の四種」とか「大株式戰の實例」とか、「株式界のモグリ」とか、或は「商品買〆談」とか云ふ題の事實談を讀んだ。そして殊に此の最後の章に最も多くの注意を拂つた。猶附錄の中の「米國放資界に於ける婦人の勢力」と云ふのなども、女の心理の赤裸々に現はれてゐるのを面白く讀ませられた。

今僕は此等の株式界の事實に對して、社會的或は經濟的批評を加へる自由を持たない。けれども桃介氏に對して一言尋ねて見たい事がある。此の本と殆んど同時に出た「實業之世界」の十一月一日號にある、氏の「ハラキリは實業界の禁物」と題した談話と、此の本の序文とは何う調和がつくのか。氏は先きの文章の中で實業界に一切の豫言を禁じてゐる。そして此の本の卷頭では、「株式豫言」と題して、「序に代へて將來株式界の大潮流を豫言」してゐる。しかし之れも、雜誌の方のはホンの一時の座談で、輕燥な大法螺を吹く先生等に當つた、例の桃介一流の癇癪玉に過ぎないとでも云ふのだらうか。

皮綴の背に金文字の入つた、株式界のバイブルとでも云はれさうな、立派な本だ。文章もすら／＼と讀ませる。（金貳圓五十錢神田表神保町東京堂）（榮）

■内觀的研究（玉利喜造著）

此の人は農學博士だ、自分が病氣になつてから、人體には靈氣邪氣の二氣が存在する事を　見した。そして此の邪氣が鬱屈すると、隨つて疾病を釀すのだといふ説を立てゝ居る。その療法としては紅療法なるものを推し、蓋し是れ邪氣排泄法に外ならぬと論じて居る。著者の議論の正否は僕の知る處ではないが、惟ふに方今醫學はあまりに所謂サイエンチフィックに傾き、難解にのみ赴き、然も病氣の性質及び病氣に對する特効藥は一も發見されて居ない。されば一方では又、極めて簡易な、自然的な、療法なり理論なりが唱導されもする。本書の如き、蓋しこの種反動的な精神の一であらう。（金八十錢京橋區南紺屋町一二實業之世界社）（寒）

■青年の敵（野依秀一著）

本書は、實業之世界社長野依秀一氏が、實業之日本に毎號掲載せられてゐる同誌の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

編輯顧問、法學博士、農學博士、第一高等學校長、新渡戸稲造氏の青年訓に對して、明治四十四年八月から大正元年十一月迄の實業之世界に逐號論難攻擊したものを蒐集したもので、題字四、序文十三、跋文六を並べて、本文五百餘頁に亘る大冊である。そして其の全篇二十六章の大半は野依氏の口述に依つて、賣文社長堺利彦氏の筆記に成る。編輯間際になつて此の書の寄贈を受けたので、僕は自然僕の目につき易い「社會主義と新渡戸博士」の章と、堺氏の跋文だけに目を通した。

新渡戸博士が明治卅五年六月發行の「勞働世界」に寄書して、「一體余の社會主義を確信するに至りしは、余が在米中三ケ年程或は彼國勞働者の首領に接したり、又或は自ら取調を爲しなどして研究する處ありし結果にして、余の此の確信は爾來年と共に固くなりつゝあるを覺ゆ」などゝ云つた其の言葉を忘れて、西川光次郎氏著「心懺語」に序して、西川氏が社會主義者になつたと聞いた時「慄然として寒心した」と云ひ、「苟くも氏の人格にして墮落せざらん限りは、早晩必ず其の主張の誤れるを悟りて、翻然として自ら悛むるの日あらんことを疑はざりき」などゝ云つてゐるのを、一々に對照して列擧した處など、實に痛快極まるものがある。それから堺氏の跋にも西川氏の所謂悔悟に就いての、頗る親切な批評が書いてある。最後に一寸書加へて置くが、ほのかに聞く處に據れば、西川氏も今は私に悔悟の又悔悟中だとの事だ。（價金一圓廿錢芝區露月町實業之世界社）（榮）

■現代戰爭論（ノルマン、エンゼル著、安部磯雄譯）

平和主義、若しくは、非戰論に關する著述は、近來著しく增加する傾向がある。然し、其の大部分は、單に道德や倫理や或は宗教的信條を基礎として論じたものか、又は近代の戰爭術其のものゝ發達傾向を前提として、戰爭といふものは、近き將來に於いて必然、消滅すべき運命を有するものなることを論じたものに過ぎない。

然るに、「現代戰爭論」は是等の著述とは其の選を異にして、經濟學、政治學、及び社會學を基礎として、現代に於ける國際關係、政治組織、及び經濟組織を精察詳論し以て近代の戰爭なるものの眞相、實質、及び效果を明かにし、其の如何に無意義にして且つ不生產的なるかを遺憾無く證明したる近來の快著である。

エンゼル氏は　近代に於ける戰爭を以て、全然消費に過ぎざるものなりと論じてゐる。即ち戰爭といふものは、昔は土地とか財貨とかいふ樣な物質的の富が獲得さるる手段であつたが、近代に至つては、之に依つて何等の所得もないのみならず、消費は永遠に消費として留まつてゐる。換言すれば、戰爭は、X（エッキス）を乘じ、然るに後、X（エッキス）にて除することに依り元の結果を得るに過ぎないといふのである。

此の結論に到達する爲めに、著者は戰爭を經濟的及び精神的の兩樣の方面より觀察してゐる。而して前者に於いては、戰爭が市場の發展、國富の膨脹、國力の增進を齎らすといふ信念が全然虛僞なることを證明し、後者に於いては、近代人は、利害勘定を離れて、敵愾心とか、正義の念とかいふ樣な抽象的の信念、動機に依つて戰爭を行ふものでは決して無いといふ理由を論證してゐる。

以上は、唯だホンノ概略に過ぎない。一體、戰爭といふものは、現今の如き經濟組織が發達する或段階に於いては、到底免か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

れ得べからざる必然的の現象である。彼の生産過剰とか、恐慌とかいふ樣な經濟現象は、戰爭と實に密接なる關係を有するものであつて、其の慘害を免れんためには、資本家は必ず、海外に向つて發展し、新市場を海外に於いて求めなければならぬ運命に立到るのである。

然し、新市場は、サウ〳〵無限に存在するものでは無い、何時かはモウ之以上發展の餘地が無いといふ程度まで押しつめるに相違ない。然るに、エンゼル氏が戰爭は國富の膨脹に對して何等貢獻する所はないと論じてゐる所を見ると、現時の經濟組織は最早海外に發展する餘地が無い迄で押しつめたものではあるまいかといふ疑問が起つて來る。然し、果して其の然るや否やは玆に遽に決定することは出來ない。

其の論ずる所の如何は別として、兎に角本書は漠然たる「非戰論」といふプレコンシーブド、アイデアから出發して、築き上げた議論ではなくして、國際關係とか、政治及び經濟組織とかいふ樣な現存の事實を詳察精論した結果になつた非戰論である。此の點に於いては、從來の此の種の著述とは大に其の趣を異にしてゐる。(定價金八十五錢　日本橋本町博文館)(愼)

■ヘッダ・ガブレルの研究

（柴田柴庵著）

ヘンリック・イプセンが不朽の世界的名聲を博したのは、青年時代の豐富な想像を披瀝した作物ではなくして、後年の作にかゝる社會劇に在るとは評家の一致せる處である。而して「社會の柱」「人形の家」「人民の敵」等は眞の意味に於ける社會劇であつて、個性に對する社會の邪曲を痛烈に攻擊せるものである。更に「海の夫人」「ボルクマン」及び此の「ヘッダ・ガブレル」等は主に個性の心理的解剖を試みたものとされて居る。柴田君は伊庭君等と一緒に近代劇協會を創めた人である。本書は四十二頁の小冊子であるが、イプセン通の諸家の說を引用して、縱橫無盡に此の劇の組織と、ヘッダガブレルの性格とを論じて居る。余り人の說が多くて少々面喰ふが　然し尠くとも眞摯なるイプセン研究として推奬するに足る物である。(定價金十錢芝區日陰町一の一近代劇協會)(寒)

■死か藝術か（若山牧水著）

著者の前の歌集「路上」と、此の「死か藝術か」とを比べて見ると、頹唐荒廢亂醉悲歌の生活より漸く內省觀照の態度に移つて來たやうに思はれる。譬へば「あと月のみそかの夜より亂醉の、斷へし日もなし寢覺に思ふ」と云ひ「酒樽をかゝへて耳のほとりにて、音をさせつゝおどる哀れさ」と云ひ、「なほ耐ゆるわれの躰をつら憎み、骨もとけよと酒を貪る」と云つた「路上」の歌の主觀的なるに比ぶれば、「秋風や日本の國の稻の穗の、酒の味ひ日に增りつれ」と云ひ「たまたまに朝早く起き湯など浴び、獨り座りてむく林檎かな」と云ひ、「いつ知らず鄕の戀の哀れさの、身にやどれるにしみじみとする」と云へる如き、「死か藝術か」にはいとゞ客觀的なる歌が多い。且つそれ奔放不羈、ひたすら情の行くが儘に任せし歌の、漸く圓熟して渾然たる趣きを示せるに於て此の書は將に著者が歌集中の第一位を占むるものであらう。只だ著者が從前の歌集を通じて見られた、悲哀と、自棄と、絕望との情緒は、亦この集をも一貫し然もそれが一層沈靜な、淡いユーモアを含んだアートを以て表現されて居る。「身も世もなく兒を可愛がる親猿の、眞赤きつらに石投げつけむ」「わびしやな又も夜露の軒下

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

に、皈りて雨戸叩かればならず」「たゞ一羽山の鳥の啼く事も、幹にわが影のうつるもさびしや」「あるとなきうすき綠の木の芽さへわが悲しみとなるも君故」で（定價金七十錢京橋區南傳馬町三ノ東雲堂）（寒）

■乃木大將論（人物社同人著）

戰爭に行く途中孫娘のやうな雛妓を買つた東鄕大將に比すれば、乃木大將はまだ眞面目かも知れぬが　要するに偏狹な　頑迷な、舊思想で頭の固まつた一介の老武辨に過ぎない。唯だ殉死といふ一事が彼を九天の高さに上げたが、あゝいふ際にあゝいふ死方をすれば誰だつてあの位には有名になる筈だ。然る　幾百と知れぬ乃木大將論中やゝ眞　目だつたのは一番惡評を蒙　つた谷本博士の議論位なもので、他は皆瘋狂院の患者の囈語に過ぎなかつた。獨り本書の著者西川光次郎君は、最も冷靜に乃木を論じ、その死因の如きも二子の戰死と旅順激戰に因する等、極めて穩當な見解を下して居る。但だ、「頑固な實行家はイカぬ寧ろ空言家や僞善家の方がイヽ」といふのは、何處かへ當て付けたやうにも聞へるが、して見ると氏は前者がイカぬと知つて後者になつた譯かナ。（金二十五錢本鄕區湯島三組町人物社）（寒）

■天闇一窺（江上新五郎著）

著者は軍務に從ふ事十有三年、其間日露戰役に從つて負傷三回、受創十有餘所と云ふ程の豪の者である。それに少時より禪を學んだ餘程の變り者である。少しでも意見を異にする上官に對しては、假借些の許す處もない。それが爲に遂に著者の邸宅は兵丁を以て圍まれ、家人は口實を作り誘出して遠ざけられ、最後　惡性の傳染病に斃死したと云ふ名目の下に、あはれ茶毘一片の煙と化しかゝつた。そして其間妙な藥品を强制的に飮ませられ或は注射　られて、發熱、發疹、發腫、頭痛、心悸亢進等の後、忽然として落節し、生來無數の疑團一時に永釋し、天地四周、自他　内外、立地に消盡して、一身宇宙を包み　古今日捷の間に去來するの希有の靈覺を感得したと云ふ。本書は即ち其の感得記である。宗教論もあれば、戀愛論もある。社會主義論もあれば情死論もある。要するに忠君愛國の感情に佛教哲學を加味したものゝやうに思はれる節がある。（價八十錢、芝區露月町實業之世界社）（榮）

■寄　贈■

三田文學　殖民地より
新公論　實業之世界
内外教育評論　婦人評論
秀才文壇　黑燿
帝國文學　奇蹟
モザイク　新潮
人生と表限　日月（創刊號）
新佛教　實業の大阪
人物　東京魁新聞
書畫骨董世界　眞人道
靑年文壇　郊外新報
靑年の敵　野依秀一著）　實業之世界社
天闇一窺（江上新五郎著）　同
内觀的研究（玉利喜造著）　實業之日本社
乃木大將論（人物社同人著）　人物社
ヘダ、ガブラの研究（柴田柴庵著）　近代劇協會
現代戰爭論（安部磯雄著）　博文館
死か藝術か（若山牧水著）　東雲堂
歐米株式活歴史（福澤桃介著）　東京堂

■十一月號目次■

□ナイヒリストの死（小説）　榮
□近代科學の傾向（評論）　大杉榮
□ムーツリテの話（寓話）　ムルタトウリ
□日記から（隨筆）　上司小劍
□槇の路（詩）　飄風
□小妹（短歌）　安成二郎
□ショウ劇「武裝と人」（梗概）　堺利彦
□ワルイド二篇（寓話）　和氣律次郎
□近代劇論（評論）　荒畑寒村
□讀んだゞけ（批評）　安成貞雄
□大久保より（雜錄）　榮

社告

■こんど讀者諸君の御便宜の爲めに、殊に新刊紹介欄を擴張して、新刊書籍の懇切なる紹介批評を試みると共に、本社に於て新本古本の取次販賣を致します。

■洋書と古本とは、豫め書物の有無及び價段の御交渉を願はなければなりませんが、新本は定價通りに戴いて、郵税だけ當方で負擔致します。

■御注文は成る可く貯金を利用せられたく、本社の振替貯金口座番號は、

東京　一七一六三番

に加入してあります。郵券代用は一切御斷り致します。

■出來るだけ廣く讀者諸君の御注文に應ずる積りではゐますが、さし當つて次ぎの十五種の書籍だけは、殊に當方から御推奬致します。

▲現代戰爭論（安部磯雄著　價金八十五錢）

▲農工業の調和（クロポトキン著　佐藤寛次譯　價金一圓三十錢）

▲豈辯を好まんや（若宮卯之助著　價金六十錢）

▲基督抹殺論（幸徳秋水著　價金七十錢）

▲賣文集（堺利彦著　價金壹圓）

▲青年の敵（野依秀一著　價金壹圓廿錢）

▲所謂新シイ女（坪内逍遙著　價金一圓）

▲赤裸の人（ルソー著　堺利彦譯　價金九十錢）

▲懺悔錄（ルソー著　石川戯庵譯　價金參圓）

▲近代文學十講（厨川白村著　價金壹圓貳拾錢）

▲黎明期の文學（相馬御風著　價金八拾五錢）

▲土（農民小説）（長塚節作　價金一圓十錢）

▲復活（トルストイ作　内田魯庵譯　價金參圓參拾錢）

▲樂天四人（堺利彦著　價金六拾錢）

▲二十世記（ショウ原作　松居松葉譯　價金五十五錢）

■定價一冊金拾錢、半年分前金五拾五錢。一年分前金壹圓。但し海外よりの御注文は別に一冊金二錢宛の郵税を要す。

■毎年數回擴大號を發行す、其場合には其定價に應じて前金より差引す。

■郵券代用は五厘切手に限る。但し一割増の事。

■廣告料特別一頁拾五圓普通拾圓。

■本社振替貯金番號一七一六三

大正元年十一月廿九日印刷納本
大正元年十二月一日發行

府下大久保百人町三五二
近代思想社内
編輯兼發行人　大杉榮

府下大久保百人町三五二
印刷人　荒畑勝三

淺草區黑船町二十八番地
印刷所　東京並木活版所

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆館

地六社復刻版

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

本會員徽章

本會員帽章

文學講義錄

本會に入會すれば

第三回新學期開講

此際入會者に限り種々の大特典を與ふ

本會には大家の所論と會員の作品を滿載せる機關雜誌新文學を無代進呈す◉本會員には文章其の他無料添削の特典を與ふ◉本會員には各種の大特典を與ふ◉本會卒業生には學資貸與の特典あり◉本會卒業生には各新聞雜誌記者其の他に就職紹介の便宜を與ふ◉本會卒業生を會友とし會員同樣種々の便宜特典を與ふ◉教授法の最新講義の平易會費低廉短期の卒業之れ本會員の常に多とする所なり

講義錄 見本附き **無代進呈** 規則書 申込次第

初等科 五ヶ月卒業

教授科目
論文。小說、新體詩、和歌。俳句。書簡文。國文、漢文、外國文學、日本文學。文學概論。新聞學。日本文典創作百話、添削實例。雜科

高等科 五ヶ月卒業

教授科目
近世文藝思潮史。藝術概論。哲學汎論、詩歌。演劇通論。明治小說史各國文學史、文章術。近世々界文豪傳、名著梗概名文註釋創作百講

東京神田西小川町　電話本局四五四七番　振替東京五二一九番

大日本文學會

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

月刊

鑛業及鑛夫

菊版二倍十二頁
一部　金五錢
一年分　金五拾錢

―来る十二月十二日創刊！

吾輩は坑夫である。しかも例の足尾事件以來鑛業界を遠ざかる事、玆に約六ヶ年。其の間吾輩は幾多の苦心慘憺たる浪人的生活の下に在つた。然れども是れ固より自ら好んで斯かる境遇に甘んじたのではない。或る事情の下に餘儀なくせられたので、稍々長き不快な夢を見たといふに過ぎない。

明治は去つた。光輝ある大正元年は來た。玆に吾輩は再び衷心からの至誠を以て、鑛業界の爲に、鑛業主と鑛夫との間に立つて、大に貢献すべき時期に到達した。吾輩は我邦鑛業界の爲に、一方鑛業主の反省を促すと共に、一方鑛夫の智力を高め、以て兩者の地位を安全に導く事を以て、目下の最大急務也と爲し、且つ是れ正に吾輩の天職たるを信ずる者である。吾輩は敢て此問題を提げて再び鑛業界に立ち奮ひ。闘力戰せん事を玆に自ら誓ふ。

東京府下淀橋町柏木百〇六

鑛業及鑛夫社主幹　南助松

歳末大賣出し

下駄と傘

本月廿日より卅一日迄

例年の通り最新形流行の御履物類各種取揃格安勉強賣出仕り候間何卒續々御買求めの程願上候

小石川區白山前町卅三白山坂中央

吉本家商店

（電話番町三千五百五十三番）

今回産室を設け便宜を計り實費を以て親切に取扱（閑靜な室あり）

姙婦親切に預

東京市本郷區元町一丁目廿六
水道給水場西通電下四二一九

産婆　前田

結婚媒介

▲理想の良縁を望む方は郵券封入御照會あれば規則書附呈す

▲弊社は時代の要求に應じ非營利的親切を旨とし迅速秘密に御世話す

東京市牛込區西五軒町廿三番地

相生社　松波彦吉

月刊雜誌

人物

第六號

十一月十五日發行

一部金五錢
十二部前金五十五錢
廿四部前金一圓
（郵税共）

本誌に對する新聞評

政治家の月旦もあれば實業家の評判もある宗教家の悪口も出れば學者の皮肉も載せてある小雑誌であるが材料豊富で活氣横溢体裁亦佳、其れで僅々一部五錢十二部五十五錢とは安いものである（中央新聞評）古今の人物を縦横無盡に評論し爬羅剔抉頗る痛快なる雜誌なり（北陸新聞評）全紙を通じて一種の特徴ある雜誌なり（扶桑新聞評）どうやら執筆者は文壇の變り物らし（米澤新聞評）執筆者諸氏何れも文壇の切れ者讀んで面白き事この上なし（越佐新聞評）

第六號目次

役者論（西川光次郎） 太閤論（福本日南） 長谷川如是閑（雷狂生） 田川大吉郎（堺利彦）
ナポレオン論（西川光二郎） 英雄研究の必要（尾池宜卿） 木堂論（尾池宜卿） 西郷隆盛論（伊藤痴遊） 英雄研究大演説會の記 内村鑑三論（安達太郎） 玉石同架 東花枝（黒頭巾）『乃木大將論』新聞評、廣告

發行所 東京市本郷區湯島三組町二十番地 人物社
振替二三一九〇番
電話下谷四七二四番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

■乃木將軍と日本新聞■

乃木將軍が其身を殺す九月十三日の朝、夫人と共に書齋に在るの狀を撮影したる寫眞は今日廣く世に傳はれる將軍夫妻好個の記念物なり

▲乃木將軍と日本新聞▼

眞摯誠實なる乃木將軍は其最後に先つ數時間、手に眞摯誠實なる日本新聞を放さゞりき

世の眞摯誠實を喜ぶの人士は幾久しく日本新聞を購讀して乃木將軍の眞摯誠實を偲び給へ

當日乃木將軍は日本新聞の第一面に在る明治天皇の御寫眞を凝視し奉りつゝありたりと推想さる日本新聞の愛讀者當日の紙面を再讀せば更に幾多の感慨あらん

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

歐米株式活歷史

ボストンのトーマス・ローソン氏は時々勢力ある米國一大雜誌に依り目下米國々民を苦しめつゝある生活費高騰の原因を指摘して、是れ少數富豪が株式取引所の濫用に由れりと云へり。往昔凡ての路のローマに通せしが如く、今や凡ての社會問題が株式と密接なる關係交渉を有する事、實にローソン氏の言の如し。今や株式界の驍將として、將た少壯實業家中の新智識として、名聲嘖々たる福澤桃介氏筆を呵して『歐米株式活歷史』を著はす。フランス革命、ナポレオン戰爭等よりも、より以上に歐米各國民の志想生活を支配影響せる株式界の一勝一敗、一起一倒、活動寫眞の映書の如く轉回し去來す蓋し活人生に對する活敎訓、實社會に處する好指針たり。社會問題研究家に對する絶好の參考書として敢て一本を江湖に薦む。

▲永久的美裝總革表紙五百二十頁▼　一部金二圓五十錢（送料金十四錢）

東京神田表神保町四

發賣所　東京堂

振替東京二七〇

近代思想　第一卷第三號

大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正元年十一月廿九日印刷納本、十二月一日發行

十二月號　金十錢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

歐米株式活歴史

ボストンのトーマス・ローソン氏は時々勢力ある米國一大雜誌に依り目下米國々民を苦しめつゝある生活費高騰の原因を指摘して、是れ少數富豪が株式取引所の濫用に由れりと云へり。往昔凡ての路のローマに通せしが如く、今や凡ての社會問題が株式と密接なる關係交涉を有する事、實にローソン氏の言の如し。今や株式界の驍將として、將た少壯實業家中の新智識として、名聲嘖々たる福澤桃介氏筆を呵して『歐米株式活歴史』を著はす。フランス革命、ナポレオン戰爭等よりも、より以上に歐米各國民の志想生活を支配影響せる株式界の一勝一敗、一起一倒、活動寫眞の映畫の如く轉回し去來す蓋し活人生に對する活敎訓、實社會に處する好指針たり。社會問題研究家に對する絶好の參考書として敢て一本を江湖に薦む。

▲永久的美裝總革表紙五百二十頁▼　一部金二圓五十錢(送料金十四錢)

東京神田表神保町四
發賣所　東京堂
振替東京二七〇

近代思想　第一卷第三號

大正元年十月一日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
大正元年十一月廿九日印刷納本、十二月一日發行

十二月號　金十錢